

## 4. ICF/ICF-CY 活用支援ツールの実証：理論編について

ここでは、ICF/ICF-CY を活用する方法試案としての活用支援ツールの実証：理論編として、次の7編の論文を掲載した。

まず、「4.1 特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用支援ツールの開発と実証の必要性について」では、特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用において「考え方」と、それを実践につなげる活用を支えるツールが同時に必要であると押さえ、開発に加えて実証の必要性について述べた。

続けて、実際のツールの開発と実証として、  
「4.2」では「特別支援教育において ICF 又は ICF-CY の活用を検討している学校等のための活用手順(試案)」について、  
「4.3」では「全体像の理解・生活全般での課題設定・各授業での指導課題等検討のための ICF 関連図作成手順』」について、  
「4.4」では「教育相談・巡回相談等で活用できる、主訴に基づいた ICF 関連図作成手順」について、  
「4.5」では「ICF-CY チェックリスト」について、  
「4.6」では「活用支援電子化ツール」について、  
「4.7」では「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY の活用を支える Web ツール」について、それぞれ述べた。

これらのうち「4.2」、「4.3」、「4.4」、「4.6」については、第5章で実証事例も掲載されているので、併せて参照されたい。



## 4.1 特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用支援ツールの開発と実証の必要性について

平成 21 年(2009 年)に発行された特別支援学校の学習指導要領等の解説の中で、ICF の考え方を踏まえた指導や必要な支援及び関係者間で実態を適確に把握したり共通理解を図る際に活用したりすることなどの様々な ICF の活用についても言及された。自立活動編においては、個々の障害による学習上又は生活上の困難を ICF との関連で捉える必要性が述べられているが、「どう捉えるか」についての具体的な言及はない。学校現場での聞き取りや本研究所での研修事業等をとおして、多くの教職員から「ICF の理念は分かった。でも、具体的にどうすればよいか分からない」といった意見を異口同音に繰り返し聞いてきた。同様のことは、同年に特別支援学校を対象に行った調査からも読み取れた。

本研究としては、特別支援教育における ICF/ICF-CY の活用は、ICF の「考え方」についての活用とツールとしての活用があると考えている。「考え方」とは、人の生活を三層構造で捉え、それらは背景因子や健康状態との相互作用の関係にあり、生活機能が低下した状態を障害として捉える等の、いわゆる理念ともいえるものである。

一方、それらを体現するものがなければ実践には繋がりにくいと考えている。それが本研究で捉える ICF/ICF-CY 活用支援ツールである。「10.4」にある日本特殊教育学会でのシンポジウムでの質疑応答の中で述べられた「現場ではツールを使いながら ICF/ICF-CY の活用について知っていくことが实际的」、「ツールがあることで観点や目的がはっきりする」といった学校現場からの声があるのは確かだと考える。他方、「4.3」において述べた、ICF/ICF-CY 活用支援ツールの一つである「ICF 関連図」の作成について、決して作成そのものが目的にならないようにすることが重要であるとも考える。

特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用において重要なことは、「考え方」と「ツール」をバランスよく活用することではないかと考える。本研究では、ツールの開発に重点を置いて進めてきたが、特に重要視したのは、学校現場の教職員の声や、学校現場での実際の活用を通じた実証である。このことは研究成果を学校現場に還元することを研究活動のビジョンとしている、本研究所の研究として欠かすことができないものとして認識し、取組んできた。

そのような観点から、4 章において各ツールの理論的整理を行い、5 章において実証事例について整理した。ぜひ参照されたい。

(徳永亜希雄)

## 4.2 特別支援教育において ICF 又は ICF-CY の活用を検討している学校等のための活用手順(試案)の開発と実証

### I はじめに

特別支援教育における ICF/ICF-CY の活用のためには、実用性の高い学校現場での活用方法の整理の必要が指摘されてきた(徳永他, 2008)ことを踏まえ、これまで本研究所では、特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用のための方法等の検討に取り組んできた。しかしながら、特別支援教育において ICF/ICF-CY を活用する際は、活用方法以前に、それぞれの学校等で ICF/ICF-CY を活用するための改善・充実させるべき教育活動上の何らかの課題等があり、そのための手段として ICF/ICF-CY を位置づけながら、活用していることが確認された(徳永他, 2010)。すなわち、ICF/ICF-CY 活用が先にあるのではなく、特別支援教育実践が先にあり、そのための改善・充実等のための手段の一つとして、ICF/ICF-CY が位置づくということになる。そして、その上に立って、多様な活用目的や活用場面、活用の観点等が位置づくことになるため、それぞれの学校等での活用は実に多様である。

そのことを踏まえ、本研究の前身となる「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際研究(平成 20 年(2008 年)～21 年(2009 年)度)」(以下、前研究)においては、以下のような手順のもとでの活用方法(試案)を検討し、提案した。

- ①各学校等の現状を分析し、改善・充実させるべき教育活動上の何らかの課題等を明らかにし、それらに関係者間で共通理解すること
- ②そのことの改善・充実のために、ICF/ICF-CY の活用が適切かどうか判断すること
- ③適切と判断された場合は、活用目的、活用場面、活用する ICF/ICF-CY の観点、活用後に期待される成果等を検討し、それらに関係者間で共通理解すること
- ④活用後、子どもにとって効果があったのか、関係者にとって効果があったのか、効果に見合うコストだったのか、より適切な方向性はどうあるべきか、等の評価をすること

そこで、基本的には考え方を踏まえ、特定の活用方法を提案するのではなく、それぞれの実情に応じた活用の仕方を検討するための「特別支援教育において ICF 又は ICF-CY の活用を検討している学校等のための活用手順(試案)」(以下、「活用手順」)を開発・実証し、提案することにした。本稿では、開発の経過と、最終的な「活用手順」の概要を中心に述べる。

### II 開発と実証の方法

前述の①～④を基本的な構成としながら、学校現場等で使いやすいツールとなるよう検討を行った。検討にあたっては、以下の三つを組み合わせながら行った。

- ①研究分担者及び研究研修員によって協議をする
  - ②筆者の一人徳永による専門研修での講義「特別支援教育における ICF の活用」の中で研究成果の一部として紹介し、任意性を持たせた上で同意を得て、講義以外の時間に専門研修員から意見を聴取する
  - ③研究協力者等の協力を得て学校現場で実証を図る
- なお、③については、「5.1」、「5.2」に概要を報告した。その結果も含めたものについて、ここでは報告している。

以下に述べる開発と実証経過の過程で、また、「はじめに」で述べた以下の①から②にかけての作業を補うツールを付加する必要があると判断された。

- ①各学校等の現状を分析し、改善・充実させるべき教育活動上の何らかの課題等を明らかにし、それらを関係者間で共通理解すること
- ②そのことの改善・充実のために、ICF/ICF-CY の活用が適切かどうか判断すること

これらを補うツールとして、「特別支援教育における ICF 又は ICF-CY 活用のための教育課題把握チェックリスト(試案)」(以下、「教育課題把握チェックリスト」)を開発・実証し、その中に含めることにした。その開発と実証の方法は以下のとおりである。

- ①本研究所で収集した特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用実践事例中の活用の背景に関する記述及び前研究において活用経験のある教職員を対象としたグループインタビューの記録から教育課題にあたる内容を抽出し、文章を短くまとめたコードを振り、研究分担者及び研究研修員による協議を繰り返してチェックリストの項目案を作成する。
- ②チェックリストの項目としての項目の適切さ等について、研究分担者及び研究研修員による協議を行うとともに、専門研修員から意見を聴取する。
- ③チェックリストへの回答結果を集約し、その結果を踏まえて ICF/ICF-CY 活用参考文献を参照できるように体裁を整えた上で、チェックリストとしての適切さ等について研究分担者及び研究研修員による協議を行うとともに、専門研修員から意見を聴取する。

### Ⅲ 開発と実証の経過

開発と実証の経過の概要について以下に述べる。

#### 1. 素案の段階～「特別支援教育において ICF 又は ICF-CY の活用を検討している学校等のための活用手順(試案) 素案 Ver. 1～2」

「はじめに」で述べた「①～④」をもとに、以下を活用手順の概要とした。

- ①各学校等の現状を分析し、改善・充実させるべき教育活動上の何らかの課題等を明らかにし、できるだけそれらを関係者間で共通理解する。
- ②そのことの改善・充実のために、ICF/ICF-CY の活用が適切かどうか判断をする。
- ③適切と判断された場合は、活用目的、活用場面、活用する ICF/ICF-CY の観点、

活用後に期待される成果等を検討し、できるだけそれらに関係者間で共通理解する。

- ④活用後、子どもにとって効果があったのか、関係者にとって効果があったのか、効果に見合うコストだったのか、より適切な方向性はどうあるべきか、等の評価をする。

①、②については話し合い等で検討し、③、④については、活用目的・活用場面・活用する ICF/ICF-CY の観点に関する選択肢から選択するとともに、記入する様式にした。これらの一連の作業の参考として、前研究の成果報告書から抜粋した、活用方法に関する参考資料添付した。

検討の結果、これだけの資料では、当該校に ICF/ICF-CY やその活用に詳しい教職員がいなければ、実際の活用には繋げにくいと判断し、「特別支援教育において ICF 又は ICF-CY の活用を検討している、(ICF/ICF-CY やその活用についてある程度詳しい人がいる) 学校等のための活用手順(試案) 素案 Ver. 2」と改題し、最初の頁に、ICF/ICF-CY やその活用についてある程度詳しい人がいる学校での使用を想定している旨と、今後多くの学校で使えるようなツールの開発を検討している旨の但し書きを添えた。

## 2. 「教育課題把握チェックリスト」の開発と連動した試案の段階～「同(試案) Ver. 3～4」

「活用手順」そのものの基本構成はこれまでと同様としたが、「(素案)」の文字を取り、開発途中であった、それぞれの学校での教育課題を把握するための「教育課題把握チェックリスト」を見せて説明を加えるようにした。併せて、前述のとおり「教育課題把握チェックリスト」についての意見を聴取した。「教育課題把握チェックリスト」の充実化が図られてきたため、Ver. 4 では、巻末の参考資料を削除した。

## 3. 同チェックリストを盛り込んだ段階～「同(試案) Ver. 5」

「教育課題把握チェックリスト」のひとつの完成を見たため、手順の中にそれを取り入れ、次のように示した。「教育課題把握チェックリスト」については、別立てで Microsoft 社の Excel で作り、コンピュータ上で操作できるようにした。詳細は後述する。また、活用を検討する際は、本研究所から発行した関連書籍及び成果報告書内にある実践報告等を参照するように示した。

- ①「教育課題把握チェックリスト」を用いて、各学校等において改善・充実させるべき教育活動上の課題等を明らかにし、できるだけそれらに関係者間で共通理解する。
- ②チェックされた箇所に対応した事例を参照しながら、そのことの改善・充実のために、ICF/ICF-CY の活用が適切かどうか判断をする。
- ③適切と判断された場合は、活用目的、活用場面、活用する ICF/ICF-CY の観点、活用後に期待される成果等を検討し、できるだけそれらに関係者間で共通理解する。
- ④活用後、子どもにとって効果があったのか、関係者にとって効果があったのか、

効果に見合うコストだったのか、より適切な方向性はどうあるべきか、等の評価をする。

#### 4. 全て電子化した段階～「同（試案） Ver. 6」

これまで「活用手順本体」は紙で示し、「教育課題把握チェックリスト」のみ Excel で電子化していたものを、全て Excel に入れ、利用の簡便化を図るとともに、データとして一括管理できるようにした。

#### 5. インターネットで事例を参照できる「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」へのリンクの整備を図った段階～「同（試案） Ver. 7」

Ver. 6において、本研究の Web サイトに連動した「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」内の事例を参照する場合、「教育課題把握チェックリスト」で明らかになった課題等から検索することが難しい状況であったため、「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」側に「活用手順」内にある文献番号から検索できるようにした。また、Excel の特徴として、操作上のミスからセル内のテキストが削除されてしまうケースがあったため、入力を求めるセル以外に入力制限をかけて、そのような不具合が生じないようにした。

#### 6. 「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」内の事例の概要をさらに見やすくした段階～「同（試案） Ver. 8」

Ver. 7において、「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」内の事例を参照した場合、その中の「ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究（平成 18 年(2006 年) 度～19 年(2007 年) 度)」研究成果報告書が冊子全体の PDF を閲覧する設定だったために、該当事例へのアクセスに困難さがあった。そこで、事例毎にデータを分解し、該当事例のみにすぐアクセスできるよう、改善を図った。

### IV 「活用手順 Ver. 8」の概要

以上のような手続きを踏まえて作成された「活用手順 Ver. 8」の概要について、以下報告する。本研究の Web サイトで既に公開されているので、そちらも参照されたい。  
<http://www.nise.go.jp/cms/8,559,52,273.html>

#### 1. 導入部分

Excel シートの 1 枚目であるここでは、「I はじめに－ICF 及び ICF-CY を活用するために－」として、「活用手順」の趣旨について説明し、活用の検討をするにあたっては、ICF/ICF-CY そのものやそのに関する情報を知っておいたほうがよいと思われるとして、以下のように関連資料を紹介している。

- ①特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え(FAQ)  
<http://www.nise.go.jp/cms/8,143,18.html>

- ②解説「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY について考える」(以下の頁のⅡ2..2 をご覧下さい。)

<http://www.nise.go.jp/cms/7,407,32,142.html>

- ③研修コンテンツ「特別支援教育における ICF の活用」を作成しました。都道府県・市等の特別支援教育センターや学校等における教職員を対象にした「研修コンテンツ」の一つです。ご利用の仕方等、詳細はこちらの頁をご覧下さい。

<http://www.nise.go.jp/cms/9,0,20.html>

続けて「Ⅱ 活用手順の概要」として次を示している。

- ①「教育課題把握チェックリスト」を用いて、各学校等において改善・充実させるべき教育活動上の課題等を明らかにし、できるだけそれらに関係者間で共通理解する。
- ②各学校等において改善・充実させるべき教育活動上の課題等の箇所に対応した事例を参照しながら、そのことの改善・充実のために、ICF/ICF-CY の活用が適切かどうかを判断する。
- ③適切と判断された場合は、活用目的、活用場面、活用する ICF/ICF-CY の観点、活用後に期待される成果等を検討し、できるだけそれらに関係者間で共通理解する。
- ④活用後、子どもにとって効果があったのか、関係者にとって効果があったのか、効果に見合うコストだったのか、より適切な方向性はどうあるべきか、等の評価をする。

## 2. 「活用手順」本編～活用の前に確認すること

Excel シートの 2 枚目であるここでは、活用の前に確認することとして、「貴校等において、改善・充実させるべき教育活動上の課題にはどのようなことありますか。特別支援教育における ICF 又は ICF-CY 活用のための教育課題把握チェックリスト（略称：教育課題把握チェックリスト）を用いて確認してみましょう。」として、「教育課題把握チェックリスト」について、以下のように説明している。

### (i) 本チェックリストの概要

この「特別支援教育における ICF 又は ICF-CY 活用のための教育課題把握チェックリスト(試案)」(以下、教育課題把握チェックリスト(試案))は、ICF 又は ICF-CY の活用を検討している際、活用しようとする集団での教育課題を明確にし、共通理解を図るために活用するための指標です。また、あわせて共通理解が図られた教育課題を解決するために、活用事例文献を紹介しています。

### (ii) 教育課題把握チェックリスト(試案) 項目の説明

教育課題把握チェックリスト(試案)は、合計 52 の項目で構成され、さらにそれらの項目は以下の 9 つのまとまりに分類されています。

- A 子どもの捉え方について
- B 実態把握について
- C 指導目標の設定について
- D 指導方法・支援方法について
- E 個別の教育支援計画・個別の指導計画等について
- F 教職員間の連携について
- G 保護者との連携について
- H 関係者間との連携について
- I 話し合い等について

### (iii) 使用の方法

- ① ICF/ICF-CY の活用を考えている集団にとって、すなわち「私たち」にとっての課題と思う項目について、「チェックリスト評価シート」の該当箇所のチェック欄に個々に@（半角）をつけます。その際、例えば@が多くなりすぎて教育課題の焦点が絞りづらくなるような場合は、@をつける数を限定したり、特に重要と思われる内容の@の色を変えたりする等の工夫をしてください。
- ② チェックされた結果は「結果集計・最終シート」, 「(参考) 集計グラフ」に自動的に集計されます。表示された数値は、集計グラフにも反映されています。課題と思っている内容の多かった項目や項目のまとまりを手がかりにして 解決しようと考えている教育課題を検討し、教職員間で共通理解します。その際、評価された結果は、評価する時期によって異なることも考慮します。なお、パソコンのディスプレイやスクリーン等で結果を見ながら話をすると、情報の共有がしやすくなり、話し合いも進めやすくなります。
- ③ 共通理解できた教育課題を「結果集計・最終シート」で教育課題となる項目（1～52）もしくはそれらのまとまり（A～I）をクリックすると、それぞれの「ICF 又は ICF-CY を活用した事例文献等の紹介」シートに飛び、教育課題を解決する参考事例を見ることができます。参考事例の概要を調べるときには、紹介された事例の下にある、「ICF/ICF-CY 活用事例文献等データベース」をクリックするとインターネット介して、データベースを見ることができますので参考にしてください。
- ④ 共通理解した教育課題を解決するために、各学校の実情（個別の支援計画の書式や運用状況等の現状）を踏まえた上で、「活用事例文献紹介シート」から ICF 及び ICF-CY の活用事例を参考にして ICF 又は ICF-CY の活用をするか否か、活用する場合はどの項目や項目のまとまりに着目して ICF/ICF-CY を活用するか判断し、最終判断欄（E 列）に○を記入します。

### (iv) 項目での用語の説明

教育課題把握チェックリスト（試案）で活用されている用語で、チェックをする

ときにイメージが持ちにくいと思われる用語について説明を以下に示しています。

活動→ 課題や行為の個人による遂行

参加→ 生活・人生場面への関わり

活動制限→ 個人が活動を行うときに生じる難しさのこと

参加制約→ 個人が何らかの生活・人生場面に関わるときに経験する難しさのこと

関係者もしくは関係者間→ 子どもにとって必要な医療・福祉・労働機関等

「〇〇のツールがある」→ 〇〇を達成するために活用している道具（ツール）のこと

### 3. 「教育課題把握チェックリスト」本編～評価と入力

Excel シートの3枚目であるここでは、52個の項目について、活用しようとする集団の参加者が個別に課題と思われる項目について、@をつけるようになっている。図1では、回答者1の欄のみ表示されているが、右側に2, 3, 4・・・と欄が設けられている。

教育課題把握チェックリストエクセルシート			
回答者チェック欄に"@@"(半角)で個々のデータを入れていくと、結果集計・最終シートに自動的に各項目の数が集計される。			
項目のまとめ	項目	チェックリスト項目	回答者1 チェック 欄
A 子どもの捉え方について	1	私たちは、子どもの問題行動の原因について子どもだけでなく、 <b>周囲の環境</b> も含めて考えている	
	2	私たちは、子どもの障害だけでなく、 <b>障害以外の部分</b> にも目を向けている	
	3	私たちは、 <b>心身機能の障害が軽度であっても</b> 子どもの活動制限や参加制約について把握している	
	4	私たちは、 <b>子どもの障害の診断名の有無にかかわらず</b> 活動制限や参加制約について把握をしている	
	5	私たちは、 <b>教職員も子どもを取り巻く環境の一つ</b> であると捉えている	
	6	私たちは、 <b>子どもの気持ち</b> に子どもを取り巻く環境が影響していると捉えている	
	7	私たちは、 <b>保護者の気持ち</b> に保護者を取り巻く環境が影響していると捉えている	
	8	私たちは、子どもの実態を <b>周囲の人が理解できるように</b> 説明している	
B 実態把握について	9	私たちは、 <b>子どもの実態</b> を把握している	
	10	私たちは、子どもを <b>多面的・総合的に捉えた</b> 実態把握をしている	
	11	私たちは、 <b>子どもの活動と参加</b> について実態把握をしている	
C 指導目標の設定について	12	私たちは、子どもを多面的・総合的に捉える <b>実態把握のツール</b> がある	
	13	私たちは、 <b>子どもの生活を考慮した</b> 指導目標を設定している	
	14	私たちは、 <b>子どもの卒業後を目指した</b> 指導目標を設定している	
	15	私たちは、 <b>子どもの中心的な指導目標</b> を設定している	
D 指導方法・支援方法について	16	私たちは、 <b>子どもの教科と自立活動との指導目標を整理</b> している	
	17	私たちは、 <b>子どもの教育的ニーズ</b> に基づいた指導・支援をしている	
	18	私たちは、 <b>個々の子どもの実態に応じた方法</b> で指導・支援している	
	19	私たちは、 <b>子どもの生活の場を踏まえた</b> 指導を行うために <b>指導内容を精選</b> している	
	20	私たちは、 <b>子どもが障害を理解するためのツール</b> がある	
E 個別の教育支援計画・個別の指導計画等について	21	私たちは、 <b>個別の教育支援計画</b> を活用している	
	22	私たちは、 <b>個別の指導計画</b> を活用している	
	23	私たちは、 <b>個別の指導計画に子どもの教育的ニーズを反映</b> している	
	24	私たちは、 <b>個別の指導計画に関係者の意見を反映</b> している	
	25	私たちは、 <b>個別の指導計画の目標を子どもの生活を踏まえたもの</b> にしている	
	26	私たちは、 <b>個別の指導計画を評価するツール</b> がある	
	27	私たちは、 <b>個別の教育支援計画と個別の指導計画をつながりのある計画</b> にしている	
	28	私たちは、 <b>指導計画の根拠を明確</b> にしている	
F 教職員間の連携について	29	私たちは、 <b>教職員間で連携して子どもの実態把握</b> をしている	
	30	私たちは、 <b>教職員間で連携して子どもの指導目標を設定</b> している	
	31	私たちは、 <b>教職員間で連携して子どもの指導・支援</b> をしている	
	32	私たちは、 <b>教職員間で子どもの社会参加や自立につながる姿</b> を共通理解している	
	33	私たちは、 <b>教職員間で子どもの情報を共有</b> している	
	34	私たちは、 <b>教職員間で共有した子どもの情報を指導</b> に生かしている	
G 保護者との連携について	35	私たちは、 <b>保護者から提供される子どもの情報を整理</b> している	
	36	私たちは、 <b>保護者が子どもの障害を受容できるように子どもの情報を伝える</b>	
	37	私たちは、 <b>保護者と子どもの指導方針について共通理解</b> している	
	38	私たちは、 <b>保護者が障害を理解するためのツール</b> がある	
H 関係者間との連携について	39	私たちは、 <b>教員だけでなく本人、保護者・専門家と交えたチームアプローチ</b> をしている	
	40	私たちは、 <b>関係者間で連携するための機会を設けて</b> いる	
	41	私たちは、 <b>関係者間で子どもの情報を共有</b> している	
	42	私たちは、 <b>関係者と相互に意見を交換</b> している	
	43	私たちは、 <b>子どもの卒業後を見据えた指導目標</b> を関係者間で共通理解している	
	44	私たちは、 <b>子どもの中心的な指導目標</b> を関係者間で共通理解している	
	45	私たちは、 <b>子どもへの支援に関する工夫</b> について関係者間で共通理解している	
I 話し合い等について	46	私たちは、 <b>子どもの生活に根ざした指導</b> にともない、 <b>関係者で役割分担</b> をしている	
	47	私たちは、 <b>関係者間で子どもを共通理解するためのツール</b> がある	
	48	私たちは、 <b>子どもの話し合いをする時間</b> がある	
	49	私たちは、 <b>子どもを同じ視点で共通理解</b> して話し合っている	
	50	私たちは、 <b>話し合いで使っている言葉の意味を教職員が共通理解</b> している	
	51	私たちは、 <b>話し合いで自分の意見</b> を出している	
	52	私たちは、 <b>自己の指導を振り返って反省</b> するようにしている	

図1 入力画面

#### 4. 結果集計・最終シート

ここには、上記の入力結果が集約され、各項目のチェックした人数が「チェック欄」に自動計算で集約される。Excelシートの5枚目である。図2では、設問1については2名の回答者がチェックをし、設問2についてはチェックをつけた者がいない等が分かる。後述する集計シート等を見ながら、最終的にどの設問の内容に対応した活用を図るのか、「最終判断」の欄に印をつける。「まとめ」のアルファベットと説明部分と「項目」の数字は、その内容に対応した文献の一覧の頁にリンクが張られていて、参照することができるようになっている。

教育課題把握チェックリスト 最終判断用リスト

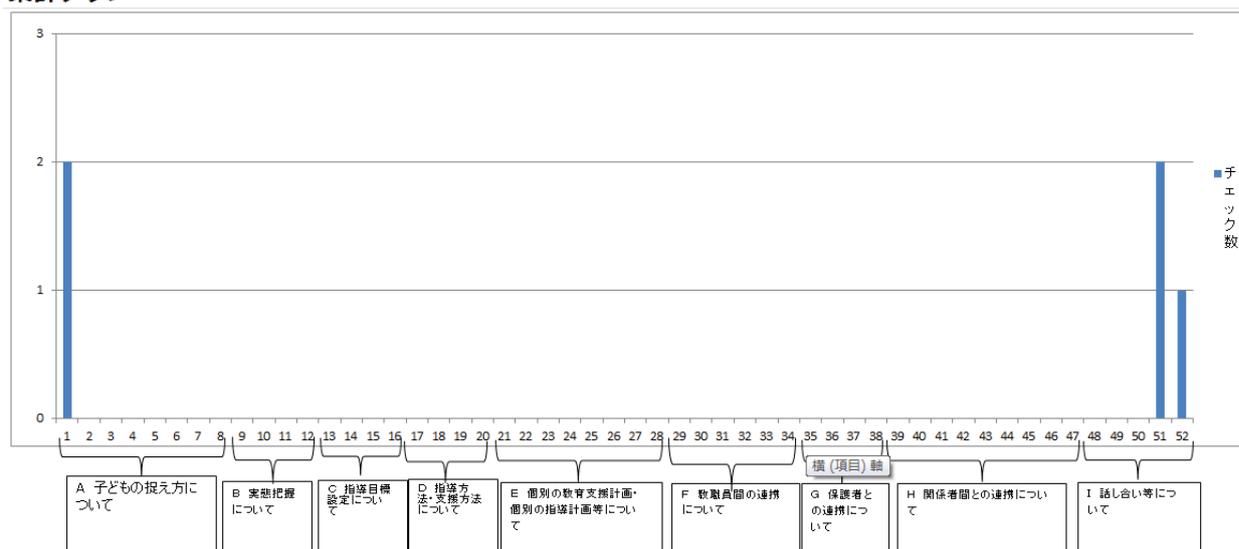
まとめ	項目	チェックリスト項目	チェック欄	最終判断
A 子どもの捉え方について	1	私たちは、子どもの問題行動の原因について子どもだけでなく、 <b>周囲の環境</b> も含めて考えている	2	
	2	私たちは、子どもの障害だけでなく、 <b>障害以外の部分</b> にも目を向けている	0	
	3	私たちは、 <b>心身機能の障害が軽度であっても</b> 子どもの活動制限や参加制約について把握している	0	
	4	私たちは、 <b>子どもの障害の診断名の有無</b> にかかわらず活動制限や参加制約について把握している	0	
	5	私たちは、 <b>教職員も子どもを取り巻く環境の一つ</b> であると捉えている	0	
	6	私たちは、 <b>子どもの気持ち</b> に子どもを取り巻く環境が影響していると捉えている	0	
	7	私たちは、 <b>保護者の気持ち</b> に保護者を取り巻く環境が影響していると捉えている	0	
	8	私たちは、 <b>子どもの実態を周囲の人が理解できるように</b> 説明している	0	
	9	私たちは、 <b>子どもの実態を把握</b> している	0	
B 実態把握について	10	私たちは、子どもを <b>多面的・総合的に捉えた</b> 実態把握をしている	0	
	11	私たちは、 <b>子どもの活動と参加</b> について実態把握をしている	0	
	12	私たちは、子どもを多面的・総合的に捉える <b>実態把握のツール</b> がある	0	
C 指導目標の設定について	13	私たちは、 <b>子どもの生活を考慮した</b> 指導目標を設定している	0	
	14	私たちは、 <b>子どもの卒業後を目指した</b> 指導目標を設定している	0	
	15	私たちは、 <b>子どもの中心的な指導目標</b> を設定している	0	
	16	私たちは、 <b>子どもの教科と自立活動との指導目標を整理</b> している	0	
D 指導方法・支援方法について	17	私たちは、 <b>子どもの教育的ニーズ</b> に基づいた指導・支援をしている	0	
	18	私たちは、 <b>個々の子どもの実態に応じた方法</b> で指導・支援している	0	
	19	私たちは、 <b>子どもの生活の場を踏まえた指導を行うために</b> 指導内容を精選している	0	
	20	私たちは、 <b>子どもが障害を理解するためのツール</b> がある	0	
E 個別の教育支援計画・個別の指導計画等について	21	私たちは、 <b>個別の教育支援計画</b> を活用している	0	
	22	私たちは、 <b>個別の指導計画</b> を活用している	0	
	23	私たちは、 <b>個別の指導計画に子どもの教育的ニーズを反映</b> している	0	
	24	私たちは、 <b>個別の指導計画に関係者の意見を反映</b> している	0	
	25	私たちは、 <b>個別の指導計画の目標を子どもの生活を踏まえたもの</b> にしている	0	
	26	私たちは、 <b>個別の指導計画を評価するツール</b> がある	0	
	27	私たちは、 <b>個別の教育支援計画と個別の指導計画をつなぐ</b> りのある計画にしている	0	
	28	私たちは、 <b>指導計画の根拠を明確</b> にしている	0	
	29	私たちは、 <b>教職員間で連携して子どもの実態把握</b> をしている	0	
F 教職員間の連携について	30	私たちは、 <b>教職員間で連携して子どもの指導目標を設定</b> している	0	
	31	私たちは、 <b>教職員間で連携して子どもの指導・支援</b> をしている	0	
	32	私たちは、 <b>教職員間で子どもの社会参加や自立につながる姿</b> を共通理解している	0	
	33	私たちは、 <b>教職員間で子どもの情報を共有</b> している	0	
	34	私たちは、 <b>教職員間で共有した子どもの情報を指導</b> に生かしている	0	
G 保護者との連携について	35	私たちは、 <b>保護者から提供される子どもの情報を整理</b> している	0	
	36	私たちは、 <b>保護者が子どもの障害を受容できるように</b> 子どもの情報を伝えている	0	
	37	私たちは、 <b>保護者と子どもの指導方針について</b> 共通理解している	0	
	38	私たちは、 <b>保護者が障害を理解するためのツール</b> がある	0	
H 関係者間との連携について	39	私たちは、 <b>教員だけでなく本人、保護者・専門家</b> を交えたチームアプローチをしている	0	
	40	私たちは、 <b>関係者間で連携するための機会</b> を設けている	0	
	41	私たちは、 <b>関係者間で子どもの情報を共有</b> している	0	
	42	私たちは、 <b>関係者と相互に意見を交換</b> している	0	
	43	私たちは、 <b>子どもの卒業後を見据えた指導目標</b> を関係者間で共通理解している	0	
	44	私たちは、 <b>子どもの中心的な指導目標</b> を関係者間で共通理解している	0	
	45	私たちは、 <b>子どもへの支援に関する工夫</b> について関係者間で共通理解している	0	
	46	私たちは、 <b>子どもの生活に根ざした指導</b> にともない、関係者で <b>役割分担</b> をしている	0	
	47	私たちは、 <b>関係者間で子どもを共通理解するためのツール</b> がある	0	
I 話し合い等について	48	私たちは、 <b>子どもの話し合いをする時間</b> がある	0	
	49	私たちは、 <b>子どもを同じ視点で共通理解</b> して話し合っている	0	
	50	私たちは、 <b>話し合いで使っている言葉の意味</b> を教職員が共通理解している	0	
	51	私たちは、 <b>話し合いで自分の意見</b> を出している	2	
	52	私たちは、 <b>自己の指導を振り返って反省</b> するようにしている	1	

図2 結果集計・最終判断画面

## 5. (参考) 集計グラフ

入力結果が、Excel シートの 4 枚目のここに入力される。図 2 は、回答者が 3 人であるため、縦軸の目盛りが最大 3 となっている。ここでは、設問 1 については、2 名の回答者がチェックをし、設問 2 については、チェックをつけた者がいない等が分かる。

集計グラフ



- 1～8 A 子どもの捉え方について
- 9～12 B 実態把握について
- 13～16 C 指導目標の設定について
- 17～20 D 指導方法・支援方法について
- 21～28 E 個別の教育支援計画・個別の指導計画等について
- 29～34 F 教職員間の連携について
- 35～38 G 保護者との連携について
- 39～47 H 関係者間との連携について
- 48～52 I 話し合い等について

図 3 参考 集計グラフ

## 6. 参考となる文献

「4」で述べた文献は、該当のまとまりと当項目毎に設定した頁に参考となる文献リストを載せており、それらの概要については、本研究の Web サイトからリンクを張った「ICF-CY 活用事例等文献データベース」で検索できるようになっている。

URL : <http://forum.nise.go.jp/icf-db/htdocs/>

図 4 は、全てのまとまり・設問・文献を一覧にした表である。

# 参考：活用事例文献紹介シート

書籍・研究成果 報告書名	ICE及びICE-CVの活用 見みから実践へ —特別支援教育者を中心に—										ICE活用の見み 職業の各々士との支援を中心に										ICE児童年間バージョンの 教育実践への活用に関する 国際的研究										特別支援教育におけるICE-CVの活用に関する国際的研究											
	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	I-7	I-8	I-9	I-10	I-11	I-12	I-13	I-14	I-15	I-16	I-17	I-18	I-19	I-20	III-1	III-2	III-3	III-4	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-7	IV-8	IV-9									
1 活 用 事 例 目 録 番 号																																										
A 子 供 の 観 点 に 関 し て																																										
B 実 践 研 究 に 関 し て																																										
C 特 殊 支 援 の 取 組 み に 関 し て																																										
D 特 殊 支 援 の 取 組 み に 関 し て																																										
E 個 別 の 支 援 計 画 ・ 個 別 の 取 組 み に 関 し て																																										
F 教 育 者 の 取 組 み に 関 し て																																										
G 保 護 者 の 取 組 み に 関 し て																																										
H 個 別 支 援 の 取 組 み に 関 し て																																										
I 他 の 取 組 み に 関 し て																																										

図4 活用文献紹介シート

## 7. 具体的な活用方法についての確認

「結果集計・最終シート」において ICF/ICF-CY の活用が適切と判断された場合は、その(1)活用目的、(2)活用場面、(3)活用する ICF/ICF-CY の観点について、それぞれ確認することとして、以下のように選択肢から選ぶ又は、書き出すようにしている。前述の通り、入力箇所のセル以外はロックをかけ、表示内容が消えることのないよう工夫している。

(1) 「活用の目的」について

1) 下記の選択肢の中から当てはまるもの（複数選択可）

( )

- ①子ども自身の自己理解のために
  - ②子どもの相互理解のために
  - ③子どもの実態把握のために
  - ④子どもの実態から課題の抽出を行うために
  - ⑤子どもの目標設定のために
  - ⑥子どもへの指導・支援内容や方法の検討のために
  - ⑦子どもへの指導・支援後の評価のために
  - ⑧子どもの在学中の先の姿をイメージするために
  - ⑨子どもの卒業後の姿をイメージするために
  - ⑩教職員間の共通理解・連携のために
  - ⑪保護者との共通理解・連携のために
  - ⑫校外の関連機関・関係者等との共通理解・連携のために
  - ⑬子どもに関する情報を資料として引き継ぐために
- 2) 上記に含まれない場合は、書き出してみましょう。

(2) 「活用の場面」について

1) 下記の選択肢の中から当てはまるもの（複数選択可）

( )

- ①個別の教育支援計画（個別の移行支援計画を含む）において
- ②個別の指導計画において
- ③授業の計画段階において
- ④個別の教育支援計画や個別の指導計画、授業計画等の間の整理において
- ⑤授業の振り返り段階において
- ⑥進路指導において
- ⑦自立活動の指導において
- ⑧交流及び共同学習において
- ⑨寄宿舎において
- ⑩センター的機能による地域支援において
- ⑪事例検討会において
- ⑫話し合いや面談において
- ⑬学校での指導内容表等の検討において

⑭統計的な情報の整理において

2) 上記に含まれない場合は、書き出してみましよう。

(3)「活用の観点」について

1) 下記の選択肢の中から当てはまるもの(複数選択可)

( )

①心身機能・身体構造，活動，参加という生活の機能に加え，環境因子や個人因子等を含めて多面的・総合的に人を理解するという考え方

②「健康状態」を重視する視点

③「心身機能・身体構造」を重視する視点

④「活動」を重視する視点

⑤「参加」を重視する視点

⑥「環境因子」を重視する視点

⑦「個人因子」を重視する視点

⑧ICF の概念図を模した図(以下、「ICF 関連図」)を用いて子どもの情報を整理する方法

⑨「ICF 関連図」等で子どもに関する複数の情報を関連づける方法

⑩「ICF 関連図」作成作業を共有する方法

⑪作成された「ICF 関連図」を共有する方法

⑫「ICF チェックリスト(独自に創意工夫したものを含む)」等により ICF 又は ICF-CY の分類項目を活用している

⑬チェックリストではなく，ICF 又は ICF-CY の分類項目そのもの

⑭ICF 又は ICF-CY の分類項目の評価点

2) 上記に含まれない場合は，書き出してみましよう。

## 8. 活用前の効果の検討

活用の前に，活用後にはどのような効果が期待されるか。また，いつの時点で，どのようなことで，その効果を評価したらよいか。以下のように書き出して検討することになっている。

(1) 期待される効果

(例：例診断名にとらわれすぎた子どもの見方と指導が多く見られるため，子どもの学習上又は生活上の困難に焦点を当てた指導ができ，個々学習上や生活上の課題の解決ができそうである)

(2) 効果を検討する時期

年 月頃

(例：平成 23 年(2011 年)12 月頃 (※2 学期までの指導の効果の評価を検討する時期)

(3) 効果を評価する手段

(例：自分たちの実態把握の視点と子どもの変容について，教員や保護者との話し合いを通して検討する

## 9. 活用後の効果の検討

活用後は、以下の項目にしたがって、効果について検討するようにしている。  
活用後の効果（プラス面及びマイナス面）について検討してみましょう。

(1) 子どもにとって効果

(例：日常生活上の課題の解決につながった)

(2) 関係者にとって効果

(例：教員の子どもの見方が多面的になった。これまでの違う取組だったので、保護者も含め、当初は混乱が見られた。)

(3) 効果に見合うコストだったのか

(例：子どもにも関係者にも成果が共有されたが、手間と時間がかかった)

(4) より適切な方向性はどうあるべきか

(例：今回の取組をもとに手順を整理し、次回取組みやすいようにしたい。)

(5) その他特記事項

(例：学校と保護者の間だけにとどまらず、関係職種との連携のための手段としても活用していきたい)

## V おわりに

特別支援教育における ICF/ICF-CY の活用のために、実用性の高い学校現場での活用方法の整理の必要が指摘されている中、特定の活用方法を提案するのではなく、それぞれの実情に応じた活用を検討するためのツール「特別支援教育において ICF 又は ICF-CY の活用を検討している学校等のための活用手順(試案)」の開発と実証の概要について述べた。

この「活用手順」を実践の中で活用した実証事例を「5.1」及び「5.2」に示したので、参照されたい。丁寧に開発と実証、そして改善を重ねてきたが、活用事例の数は十分でなく、今後さらに実証を重ねる必要があると考えている。

とはいえ、決して ICF/ICF-CY ありきにならない、目的に応じた活用を検討できる、「3.1」でも菊地が強調している「なんのために」というところを常に確認できる有用なツールではないかと考えている。本ツールが学校現場等での実践に寄与することを強く願っている。

(徳永亜希雄，溝端英二)

## 文献

1. 徳永亜希雄・笹本健・大内進・萩元良二・西牧謙吾・渡邊正裕 (2008). 本研究の成果と課題. 今後の展望. 国立特別支援教育総合研究所「ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究 (平成 18 年度～19 年度)」成果報告書. 157-158 .
2. 徳永亜希雄・松村勘由・大内進(2010). 特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用の背景等についての一考察—ICF 及び ICF-CY 活用経験者等へのフォーカスグループインタビューを通して—. 国立特別支援教育総合研究所. 「特別支援教育にお

- ける ICF-CY 活用に関する実際的研究(平成 20～21 年度)」成果報告書. 13-19.
3. 徳永亜希雄・松村勘由・加福千佳子・小林幸子(2010). 特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用方法 (試案) の提案について. 前掲書. 129-137.

### 4.3 「全体像の理解・生活全般での課題設定・各授業での指導課題等検討のための ICF 関連図作成手順」の開発と実証

#### I 研究の趣旨と目的

特別支援学校における ICF/ICF-CY の活用については、多様な取組があることが報告されている（松村他，2010）。その中において、活用の観点として、「ICF の概念図を模した図（以下、ICF 関連図）を用いて幼児児童生徒の情報を整理する方法」は3番目に多いという結果だったが、これまでの特別支援教育における ICF/ICF-CY を活用した実践報告の蓄積から、最も多い回答となった「心身機能・身体構造，活動，参加という生活の機能に加え，環境因子や個人因子等を含めて多面的・総合的に人を理解するという考え方」についても，そのことが実践に生かされる場合は ICF 関連図が用いられることが多いと推察できる。

以上のような状況を踏まえ，ICF 関連図については，本研究の前身の研究となる「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際的研究（平成 20 年(2008 年)～21 年(2009 年)度）」（以下，前研究）において，成果報告書の中で『ICF 関連図』の活用について」として整理した。その中では，ICF 関連図とは多様なものであることを押さえた上で，ICF/ICF-CY 活用においては，必ず ICF 関連図を使わなければならないわけではなく，また，それぞれのものが ICF/ICF-CY 活用ではないことを述べた。その一方で，子どもの多面的・総合的な理解や関係者の連携等において有用なツールの一つであると考えられ，これまでの蓄積をさらに整理し，検証しながら，より効果的な ICF 関連図作成について検討を進めたい旨を述べた（徳永他，2010）。

本報告書の中でも ICF 関連図が多く使われているが，大久保（2007）がワークシートと付箋紙を用いて本人にとって望ましい参加・活動の姿を想定し，そのことに関連する実態を洗い出し，支援計画を作るための ICF 関連図作りについて報告して以降，作成のための手順等は報告されていない。

一方で，「4.2」等で述べているとおり，ICF/ICF-CY の活用は，それぞれの実情，目的に応じてなされるべきであり，固定的な，絶対的に正しい活用方法等はなく，それぞれの目的に応じた活用が望ましいと本研究では押さえている。したがって，活用にあたってはその目的が重要であり，ICF 関連図を活用する場合も同様として考えている。

他方，前述の調査では，最も多い活用場面は，個別の教育支援計画における活用であることが報告された。一般的に，個別の教育支援計画では，対象となる子どもの実態把握から始まり，中心的な課題や目標が検討され，学校でいえば，個別の指導計画等と連動した形で，各教科や領域，そして各授業へと繋がることになる。したがって，

ICF 関連図の最も多い使われ方の一つとして、子どもの実態を整理し、各授業へつなげるためのところに貢献できるものがあることが望ましいと考えた。

そこで、「子どもの全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討するため」という目的のもとでの ICF 関連図の作成手順について検討することにした。本稿では、開発・実証の経過と最終的な ICF 関連図作成手順の概要を述べ、最後に実態把握の際の ICF 関連図と他の方法との比較の試みを中心に述べる。

## II 方法

### 1. 開発と実証の方法

前述の大久保（2007）による「ICF 関連図作成手順例」をベースに、子どもに関する情報を付箋紙に書きこみ、図 1 の大久保(2007)のワークシートに貼ったり、シート上に書き込んだりする作業を基本設計としながら、以下の三つを組み合わせながら開発と実証を行った。

- ①研究分担者及び研究研修員によって協議をする
- ②研究所内外の研修の場で活用し、研修参加者から任意に意見を聴取する
- ③研究協力者等から意見を聴取する
- ④研究協力者の協力を得て学校現場で実証を図る

なお、④については、「5.3」、「5.4」に概要を報告した。それらの結果も含めたものについて、ここでは報告している。

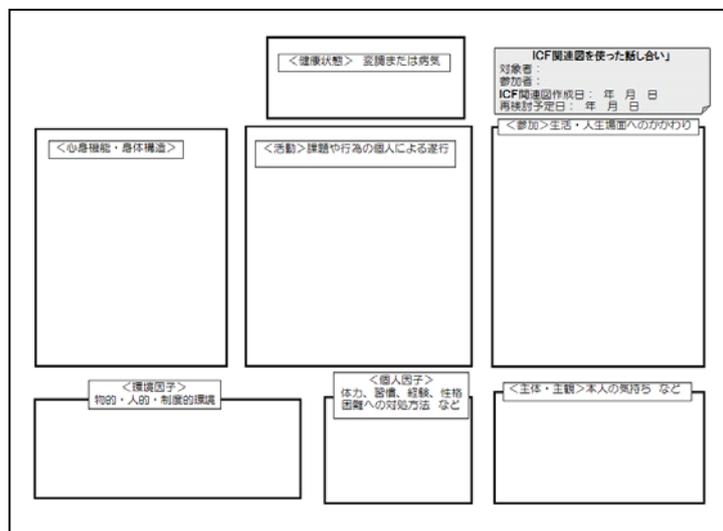


図 1 大久保(2007)によるワークシート

### 2. 実態把握における ICF 関連図と他の方法の比較に関する方法

本研究専門研修の研究協議の一環として、仮想事例の実態把握と課題の検討のため、本稿で述べている「全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での

各授業での指導課題等を検討するための ICF 関連図作成手順 Ver. 3」と KJ 法を参考にした方法でケース検討を用い、その結果や作業経過についての協議を通して両者の比較検討を行った。対象事例は、漫画「ドラえもん」の登場人物「のび太」とした。検討を行ったのは本研究所専門研修員 9 名で、全て特別支援学校教員だった。4 名と 5 名の 2 グループに分かれ、同時進行で約 60 分間の検討を行った後、結果と作業過程について協議をし、それらの比較検討を行った。

### Ⅲ 開発と実証の経過

開発と実証の経過の概要について以下に述べる。

#### 1. これまでの研修での活用をベースに改編した段階～「全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討するための ICF 関連図作成手順 Ver. 1」

これまでの研修等で聴取された意見等をもとに、本人の願いをもとにした大久保(2007)の作成手順を「子どもの全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討するため」という目的に合うよう、改編した。その際、以下の基本的な流れをベースに検討を進めた。

- ①子どもの実態（含、気持ち）を付箋紙に書き出す
- ②付箋紙を ICF 関連図のワークシートに分類する
- ③関連する事柄同士を矢印で結ぶ
- ④生活全般での課題を検討する
- ⑤学校での各授業等での指導課題、指導や支援の分担・再検討日等を決める

#### 2. これまでの研修での活用をベースに改編した段階～「同 Ver. 2」

研修参加者や研究協力者等からの意見を踏まえ、以下の 3 点の改善を図った。

##### （1）基本的な流れの改善

前述の「①～⑤」の流れの中で、ICF が持つ多面的な見方という特徴を生かすため「② 付箋紙を ICF 関連図のワークシートに分類する」と「③関連する事柄同士を矢印で結ぶ」の間に「落としている情報がないかどうか、確認する」という段階を入れた。ここでは、捕捉資料として作成した ICF-CY の第 2 レベルの分類項目の一覧表を配布するか、ICF 又は ICF-CY の冊子—いわゆる「赤本」—を貸与して、対象となる子どもについて、見落としている情報がないかどうか確認するようにした。

##### （2）「付箋紙に書き出す時の留意点」の追加

ICF 関連図を用いた取組の中で、もっとも多く分かりづらさの指摘があるのが、(3)で述べる、ワークシート上での付箋紙の分類での迷いである。分類の際の迷いを軽減し、その後続く項目間の関連づけもしやすくするためには、付箋紙に情報を端的に書くことがポイントであることが分かってきている。そこで、以下のとおり、本稿末

資料のスライド 13 枚目の内容を加えた。

- 一枚の付箋には一つの情報を短く書く。  
例) ○ 【姉の側を離れない】【面倒見の良い優しい姉】  
× 【姉の面倒見がよく優しいので、姉の側を離れようとしなない。】
- 難しいこと、苦手なこと等のマイナス面だけでなく、できること、得意なこと等のプラスの面も含めて書く。
- 場面によって違いがあるような時は、本人の様子とともに状況に関する情報を書く。(※後でそれらを線で結ぶ)  
例)【集中して学習に取り組む】【取り出し指導】【落ち着きがない】【縦割り学習】

### (3)「付箋紙を分類する際の留意点」の追加

前述のとおり ICF 関連図を用いた取組の中で、もっとも多く分かりづらさの指摘のあるワークシート上での付箋紙の分類での迷いを軽減するためのものとして、以下のとおり、本稿末資料のスライド 12 枚目の内容を加えた。一連の作業の目的は、ICF 関連図の作成を通して、子どもの情報を整理し、指導や支援とつなげるための検討を行うことであるため、分類そのものに労力をかけすぎないのがポイントである。

- 誰かが進行役になりながら、話し合いを進める。
- 一人が一つの付箋紙を読みあげながら、構成要素の枠に分類する。同じ内容が書かれた付箋紙があるときは、自分も同じであることを伝え、その付箋紙と重ねて貼る。
- 付箋紙に同じ内容が書かれていても、状況等の捉えた場面が違うこともあるので、付箋紙の内容を書いた理由の説明を適宜加える。
- 分類の際はスライドにある定義や分類項目一覧表、「赤本」等を参考にして、当てはまる枠を検討する。  
例) ①運動について苦手の状況の場合  
→苦手意識のほうを重視する場合は主観・主体へ  
→運動全般の不器用さ等の場合は、活動へ  
→機能や構造に課題がある場合は、心身機能・身体構造へ  
→複数のところに分けて、それぞれについて書くこともできる  
②DS が好き→興味関心に関することとして 個人因子へ 等
- 付箋紙の分類時に迷う際は、どこか便宜的に貼っておいて、後から行うで繋いでいく作業の際にあらためて考える。(※どこに分類するかを考えることに労力をかけすぎない。)

## 3. 実際のケース会議等での進行しやすさを取り入れた段階～「同 Ver. 3」

研修参加者や研究協力者、特に学校現場での実際の活用を通じた意見を踏まえ、実際のケース会議等での進行しやすさに考慮した改編を行った。最も大きな変更は、Ver. 2 まではスライドのみの資料だったのに対し、本稿末資料のとおり、ノート部分に説明書きを明示して、ノートの形で印刷し、参加者間で共有することである。このことにより、これまでスライドに書かれていたこと以外の暗黙知が形式知となり、より使いやすくなったとの指摘を受けた。

#### IV 「全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討するための ICF 関連図作成手順 Ver. 3」の概要

以上のような手続きを踏まえた作成された「Ver. 3」は、本稿末資料にあるとおりである。前述の通り、基本構成は次のようになっており、ワークシートと付箋紙、ICF・ICF-CY の分類項目がわかる資料を用意し、スライドとノート部分の説明を見ながら、進行役が進めていくことになる。

- ①子どもの実態（含、気持ち）を付箋紙に書き出す
- ②付箋紙を ICF 関連図のワークシートに分類する
- ③落としている情報がないかどうか、確認する
- ④関連する事柄同士を矢印で結ぶ
- ⑤生活全般での課題を検討する
- ⑥学校での各授業等での指導課題、指導や支援の分担・再検討日等を定める

この資料を用いた学校現場での実際の取組については「5.3」、「5.4」に報告があるが、研修場面においてもかなり多く取り入れ、対象児の理解と指導・支援について検討の分かりやすさ、取組やすさ等の意見を多く得ている。長期休業中のような比較的時間が取りやすい時は、「10.2」にある模擬ケース会議を一度行った後、実際事例を対象にして本資料を用いて取組むとより分かりやすくなるのがこれまでの検討から分かっている。

#### V 実態把握時における ICF 関連図と他の方法との比較

湯野(2011)は、本研究所専門研修の研究協議の一環として行った、「全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討するための ICF 関連図作成手順 Ver.3」と KJ 法を参考にした方法とによる、漫画「ドラえもん」の登場人物「のび太」の実態把握と課題の検討を行い、両者の比較として次の表のとおりまとめている。

両者の比較の結果、KJ 法を参考にした課題関連図では、①どれも本人に関わることなので矢印が全部に関わる、②分類した項目に名前をつけることが難しく手間を感じた、③あげられた情報が偏ったものであっても、気付きにくい、との気づきが得られたのに対し、ICF 関連図を用いた方法では、①項目があるため、不足している情報が分かりやすい、②矢印を結ぶことで相互の関係が分かりやすい、③検討したい部分が見えてきやすい、④具体的な支援の方向が見えてきやすい、⑤自立活動の項目と比較すると、抜けている部分が多いということを報告している。

湯野の指摘は、これまで研修の中での取組や学校現場での ICF 関連図、特に全体像から全体的な課題、そして各授業での取組等を検討する際に活用されてきた取組の中で多く指摘されてきたことが端的にまとめられていると考える。

#### VI 考察とまとめ

本稿では「全体像の理解を踏まえた，生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討するための ICF 関連図作成手順 Ver. 3」として整理する取組として，開発・実証の経過と最終的な ICF 関連図作成手順の概要を述べた。今回の取組により，研修や学校現場での実際の活用の中で積み上げられてきた多くの暗黙知を形式知として整理し，その方法を多く共有できるようになるとともに，これまで取組んできた比較的熟練した立場にある人からも使いやすさと説明のしやすさが指摘された。実際に活用した取組については「5.3」，「5.4」に報告しているので参照されたい。また，前述のように研修において活用する場合は「10.3」にあるような取組に加えて本作成手順を用いると効果的であることも付言したい。

また，実態把握の際の ICF 関連図と他の方法との比較の試みにおいては，これまでも ICF/ICF-CY を活用した取組の中で多く報告されてきた，不足している情報の分かりやすさ，対象児/者の個々の情報の相互関係の分かりやすさ，課題の焦点の絞りやすさ，支援の方向性の検討しやすさといった成果や，自立活動の項目との比較における気づきについて，あらためて確認された。自立活動との比較については「10.1」に報告しているので参照されたい。

本稿では，ICF 関連図の「作成手順」として整理してきたが，多くの教職員との ICF 関連図作成演習を行う中で，目的の本質は ICF 関連図を作成することそのものではないことに気づかされる。真に必要なことは ICF 関連図作成を通して，全体像の理解を踏まえた，生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討することである。決して ICF 関連図作成することのみに傾倒しないような手順となるよう，さらなる改善を図っていきたい。

(徳永亜希雄，溝端英二)

## 文献

1. 松村勘由・加福千佳子・徳永亜希雄・小林幸子(2010). 特別支援学校における ICF 及び ICF-CY についての認知度・活用状況等に関する調査のまとめ（最終報告）. 国立特別支援教育総合研究所 Web サイト.
2. 大久保直子 (2007). ICF 関連図作成手順マニュアルを検討した取り組み. 国立特別支援教育総合研究所編著 (2007). ICF 及び ICF-CY の活用 試みから実践へー特別支援教育を中心にー. 110–117. ジアース教育新社.
3. 徳永亜希雄・松村勘由・加福千佳子・小林幸子(2010). ICF 関連図の活用について. 前掲書. 59-64.
4. 湯野志津香(2011). 国立特別支援教育総合研究所平成 23 年度特別支援教育専門研修レポート「授業づくりにおいて大切にしたいこと」(5 班研究協議「はじめの一步～ぼくらの授業づくり～」より).

表 2つの関連図からののび太の課題と気付き(湯野, 2011)

	“実態からの課題関連図”	“ICF 関連図”
方法	<p>① 気になる所や課題のある所, 得意な所などを付箋紙に書き出す。</p> <p>② 付箋紙を項目ごとに分けて整理する。項目立てで基本になるのは自立活動の6区分。それ以外でも良い。(実態把握を行う教員のグループによって特徴がでることもある。)</p> <p>③ 関連する項目同士を矢印で結ぶ。</p>	<p>① 子どもの実態(含, 気持ち)を付箋紙に書き出す。</p> <p>② 付箋紙をICF関連図のワークシートに分類する。</p> <p>③ 落としている情報がないか, 確認する。</p> <p>④ 関連する事柄同士を矢印で結ぶ。</p> <p>⑤ 生活全般での課題を検討する。(講義: 特別支援教育におけるICFの活用より)</p>
のび太の課題	<p>&lt;将来像&gt; 自分に自信を持ち, 問題を自分で解決しようとする。</p> <p>◆全体を見通して, 学習面や心理面への支援が必要である。 →支援が必要な理由は, 自分に自信がないから。 →自信をつけるために, 自己肯定感を育て, 自分で問題を解決できるようになってほしい。</p> <p>◆得意な分野で友達と一緒に活動すること。(あやとり, ストーリー作りなど)</p> <p>◆正しく読み書きをすること。</p>	<p>◆正しく読み書きをすること。 →機能的に問題がないようであれば, 見え方の実態把握を行い, 読み書きへの支援を行う</p> <p>◆面倒くさがりだったり, 意志が弱かったりすることの克服。 (「ドラえもんに助けてもらえばいい」と思う気持ちが強いことも一因) →自分でやりきれるような活動から, 成功体験を積む。短い手順での活動を用意する。</p> <p>◆人とのかかわり方を身に付ける。 (思ったことをすぐ口にしてしまい, 相手を傷つけたり, 怒らせたりすることが多い。) →SSTで関わり方を学ぶ。</p> <p>◆遊びを増やす。 →手先が器用。本人の得意なことを生かして周囲の人に良さをアピールする。</p>
気付いたこと	<p>◎どれも本人に関わることなので, 矢印が全部に関わる。</p> <p>◎分類した項目に名前をつけることが難しく, 手間に感じた。</p> <p>◎あげられた情報が偏ったものであっても, 気付きにくい。</p>	<p>◎項目があるため, 不足している情報が分かりやすい。</p> <p>◎矢印を結ぶことで相互の関係が分かりやすい。</p> <p>◎検討したい部分が見えてきやすい。</p> <p>◎具体的な支援の方向が見えてきやすい。</p> <p>◎自立活動の項目と比較すると, 抜けている部分が多い。</p>

子どもの全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等を検討するための「ICF関連図」作成手順 (ver.3改<sup>20110802</sup>)

（永久保、2007年をもとに改稿）

国立特別支援教育総合研究所



国立特別支援教育総合研究所  
「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する研究  
―活用のための方法試案の実証と普及を中心に―」研究チーム

この資料は、国立特別支援教育総合研究所による研究成果に基づいて作成された「子どもの全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等」を検討するための「ICF関連図作成手順」です。

特別支援教育におけるICF活用については、それぞれ活用の背景や目的が異なり、多様な取り組みが行われていること同研究所から報告されています。したがって、活用にあたっては、それぞれの学校現場等での解決あるいは改善すべき課題等を明らかにした上で、活用の目的を明確にすることが重要と考えられます。

ここでは、「子どもの全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業での指導課題等」を検討するための「ICF関連図」という目的のもとで「ICF関連図」を作成する手順について紹介します。

左側の写真は、実際に作成されたICF関連図の例で、多様な取り組みとはいえ、このような図が作成されることが多いようです。  
右側の写真は、ある特別支援学校で寄宿舍指導員と教員によってICF関連図作成をしている様子です。

「ICF関連図」とは

- ICFの概念図を模した図に対象児/者の情報を整理して、個々の情報、情報間の関連などを検討するための図。
- ICFには含まれない本人の気持ち（「主観・主体」等）を付加されたものも多い。
- 多くの情報を盛り込み、実態把握などに使われる通称「全体図」、ある特定の内容の実態にしぼったり、特定のゴールを想定したりして、ケース会議等で使われる通称「部分図」等がある。

まず最初に「ICF関連図」について紹介します。

「ICF関連図」とは、ICFの概念図を模した図に対象児/者の情報を整理して、個々の情報、情報間の関連などを検討するための図のことを指します。もともとWHOから出されているのではなく、ICFを活用する取り組みの中で出てきたものの通称です。

ICF関連図には、ICFの概念図には含まれない、「主観・主体」等といわれる本人の気持ちの部分を付加されたものも多く見られます

ICF関連図には、対象児/者の多くの情報を盛り込み、実態把握などに使われる通称「全体図」や、ある特定の内容の実態にしぼったり、特定のゴールを想定したりして、ケース会議等で使われる通称「部分図」等があります。

### 続：「ICF関連図」とは

- その中から対象児/者の課題(≠できないこと)や指導/支援の手がかりを検討する等に使用されることが多い。
- 話し合いのツールとして使われたり、引き継ぎのための資料として使われたり、それらが併用されたりする。
- ICFチェックリスト等での評価後に作成されたり、今ある情報から作成されたりする(※今回のバージョンは後者です)。

ICF関連図について続けて説明します。

ICF関連図では、書き込まれた情報の中から対象児/者の課題や指導/支援の手がかりを検討する等によく使われています。  
ここでいう課題とは、必ずしも本人にとって「できないこと」を意味するのではなく、学習課題等を指すことも多々あります。

ICF関連図は、話し合いのツールとして使われたり、引き継ぎのための資料として使われたり、それらが併用されたりします。

ICF関連図を作成するにあたっては、ICFあるいはその児童版であるICF-CYの分類項目を用いたチェックリスト等での評価した後に作成されたり、今ある情報をもとに書き出しながら作成されたりします。

今回のバージョンは後者となっています。

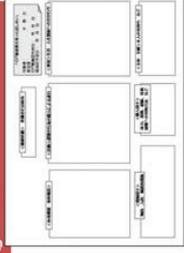
### 今回の「ICF関連図」作成の目的

子どもの全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業等での指導課題を検討すること

※生活全般の課題とは、できないことや難しいことではなく、本人の成長発達にとって、中心に据えて指導や支援を行いたい事柄のことです。

### 準備する物

- 1)「ICF関連図」のワークシート(A3版以上が望ましい)
- 2)付箋紙  
1×5センチくらいのもの
- 3)ICFの分類項目が分かるもの  
(「赤本」、分類項目一覧表など)
- 4)鉛筆、消しゴム

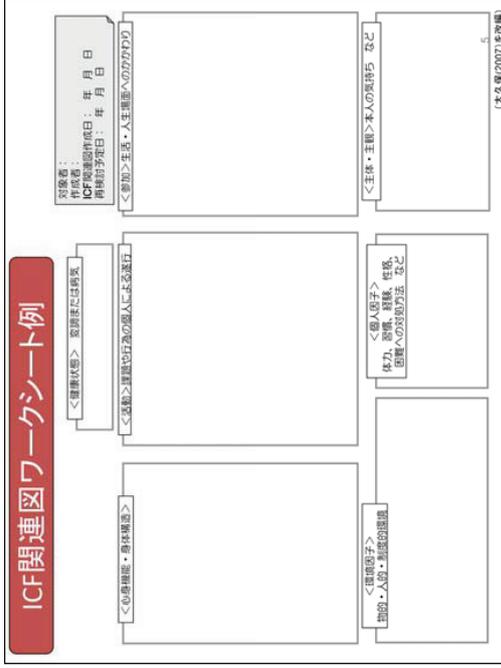


あらためて、今回の「ICF関連図」作成の目的を確認します。

一連の作業を通して、子どもの全体像の理解を踏まえた、生活全般での課題設定と学校での各授業等での指導課題を検討することを目的としています。  
生活全般の課題とは、できないことや難しいことではなく、本人の成長発達にとって、中心に据えて指導や支援を行いたい事柄のことです。

次に、準備する物についてです。

- 1) 「ICF関連図」のワークシート  
付箋紙を貼っていくためにA3版以上の大きさが望ましいです。A2のほうがより見やすかった例もあります。
- 2) 付箋紙  
大きすぎると収まりづらくなるので、1×5センチくらいのものが望ましいです。
- 3) ICFの分類項目が分かるもの  
いわゆる「赤本」といわれるICFやICF-CYの冊子、あるいはICF-CYの分類項目一覧表などです。
- 4) 鉛筆、消しゴム  
適宜修正を可能にするため、ペンよりも鉛筆を用いたほうがよいようです。



ICF関連図ワークシートの例です。

研修に用いる際は一人に1枚ずつ資料として配っても良いですが、話し合いの時は、グループに一枚用意し、参加者の中心において用います。



今回の「ICF関連図」作成は以下のような流れとなります

- (1) 子どもの実態(含、気持ち)を付箋紙に書き出す
- (2) 付箋紙を「ICF関連図」のワークシートに分類する
- (3) 落としている情報がないかどうか、確認する
- (4) 関連する事柄同士を矢印で結ぶ
- (5) 生活全般での課題を検討する
- (6) 学校での各授業等での指導課題、指導や支援の分担・再検討日等を決める

これらの作業を通して、図の作成そのものよりも、その過程で子どもについてより深く考えたり、話し合ったりすることを通して子どもの実態に多面的に捉え直すことを大事にしましょう。



## 付箋紙に書き出すときの留意点

●一枚の付箋には一つの情報を短く書く。

例) ○ 姉の側を離れない 面倒見の良い優しい姉

×  
 姉が面倒見がよく優しいので、  
 姉の側を離れようとしてない。

●難しいこと、苦手なこと等のマイナス面だけでなく、  
 できること、得意なこと等のプラスの面も含めて書く。

●場面によって違いがあるような時は、本人の様子と共に  
 状況に関する情報を書く。(※後でそれらを線で結ぶ)

例) 集中して学習に取り組み、取り出し指導

落ち着かない 縦割り学習

9

付箋紙に書き出すときの留意点を3点述べます。

1) 一枚の付箋には一つの情報を短く書くようにします。

例を挙げます

・姉の側を離れない、面倒見の良い優しい姉

はよいですが、

・姉が面倒見がよく優しいので、姉の側を離れようとしてない

のように因果関係が一つにまとめられることは望ましくありません。

そのことは、後からそれぞれの事項の相互作用を考える際に検討することになります

2) 難しいこと、苦手なこと等のマイナス面だけでなく、できること、得意なこと等のプラスの面も含めて書くようにします。

3) 場面によって違いがあるような時は、本人の様子と共に状況に関する情報を  
 書くようにし、後でそれらの相互作用関係を考え、線で結んでいくことになり  
 ます。

例えば、集中して学習に取り組み、取り出し指導、落ち着かない、縦割りの学  
 習 などです。

**(2) 付箋紙の分類**

・(1)で書いた付箋紙を、順にワークシートの枠(活動・環境因子など)にはりませす。同じ内容の付箋は確認し合いながら1枚にします。  
 ・次のスライドにある定義や分類項目一覧表、「赤本」等を参考にして、当てはまる枠を検討しましょう。

<p>&lt;活動&gt; 質問や行為の個人による実行</p> <p>食べ物の名前は、いくつか理解</p> <p>写真・絵で理解できる事例あり</p> <p>単語を言うが、不明瞭</p> <p>注意喚起:手を引く、声を出す</p> <p>要求:細かい内容が伝わらず怒る</p> <p>コミュニケーションが低い</p> <p>痛み・刺激</p> <p>離れやすい</p>	<p>&lt;行動&gt; 生活・人間性へのこだわり</p> <p>家族には何となく意思が伝わる</p> <p>ヘルパーには意思が伝わりにくい</p>	<p>&lt;個人因子&gt;</p> <p>体力、知能、性格、性格、性格、性格への認知方法、など</p> <p>善手意識が強い</p> <p>すぐに諦める</p>
<p>&lt;感情因子&gt; 物的・人的・制度的環境</p> <p>親・教師から多くの支援を受けている</p> <p>親・教師の態度は+の促進因子</p> <p>ヘルパーを拒用する確率は多い</p>	<p>&lt;環境因子&gt;</p> <p>主体・主観&gt;本人の気持ち、など</p> <p>僕のこと分かってよ!</p> <p>どうやって伝えたらいいの?</p>	<p>10</p>

付箋紙の分類をします。

(1) で書いた付箋紙を、順にワークシートの枠(活動・環境因子など)にはりませす。同じ内容の付箋は確認し合いながら1枚にします。

次のスライドにある定義や分類項目一覧表、「赤本」等を参考にして、当てはまる枠を検討しましょう。

**(参考)ICFの各次元・要素の定義・内容等**

**心身機能**: 身体系の生理的機能(心理的機能を含む)  
**身体構造**: 器官、肢体とその構成部分などの、身体の解剖学的部分  
**活動**: 課題や行為の個人による遂行  
**参加**: 生活・人生場面への関わり  
 (※「参加」と「活動」の項目は分けられていません)  
**環境因子**: 人々が生活し、人生を送っている物的・社会的・環境的・態度的環境(※マイナスである阻害因子だけでなく、プラスとなる促進因子にもなります)  
**個人因子**: 個人の人生や生活の特別な背景(※具体的な分類項目はありません)

※**主体・主観**: 本人の気持ち (←本来ICFには含まれません)

付箋紙を分類する際に参考となるICFの各次元・要素の定義・内容等は以下の通りです。

**心身機能**: 身体系の生理的機能(心理的機能を含む)

**身体構造**: 器官、肢体とその構成部分などの、身体の解剖学的部分

**活動**: 課題や行為の個人による遂行

**参加**: 生活・人生場面への関わり

「赤本」では、「参加」と「活動」の項目は分けられていませんので、個人に完結している内容は活動に、人とのかわりや生活・人生にかかわる場合は参加として整理しましょう。

**環境因子**: 人々が生活し、人生を送っている物的・社会的・態度的環境

**環境因子**はマイナスである阻害因子だけでなく、プラスとなる促進因子にもなります

**個人因子**: 個人の人生や生活の特別な背景

「赤本」に例は挙がっていますが具体的な分類項目はありません

**主体・主観**: 本人の気持ち

本来ICFには含まれませんが、重要な内容だと考えられます。

**付箋紙を分類する際の留意点**

- 誰かが進行役になりながら、話し合いを進める。
  - 一人が一つの付箋紙を読みあげながら、構成要素の枠に分類する。同じ内容が書かれた付箋紙があるときは、自分も同じであることを伝え、その付箋紙を重ねて貼る。
  - 付箋紙に同じ内容が書かれていても、状況等の捉えた場面が違うこともあるので、付箋紙の内容を書いた理由の説明を適宜加える。
  - 分類の際はスライドにある定義や分類項目一覧表、「赤本」等を参考にし、当てはまる枠を検討する。
- 例)①運動について苦手の状況の場合
- 苦手意識のほうを重視する場合は主観・主体へ
  - 運動全般の不器用さ等の場合は、活動へ
  - 機能や構造に課題がある場合は、心身機能・身体構造へ
  - 複数のところに分けて、それぞれについて書くこともできる
- ②DSが好き→興味関心に関することとして 個人因子へ
- 付箋紙の分類時に迷う際は、どこか便宜的に貼っておいて、後から行うで書いていく作業の際にあらためて考える。(※どこに分類するかを考えることに労力をかけすぎない。)

(2) 付箋紙を分類する際の留意点を5点述べます。

- 1) 誰かが進行役になりながら、話し合いを進めましょう。
- 2) 一人が一つの付箋紙を読みあげながら、構成要素の枠に分類する。同じ内容が書かれた付箋紙があるときは、自分も同じであることを伝え、その付箋紙を重ねて貼っていき、一つにまとめたおもしろします。
- 3) 付箋紙に同じ内容が書かれていても、状況等の捉えた場面が違うこともあるので、付箋紙の内容を書いた理由の説明を適宜加えましょう。

4) 分類の際はスライドにある定義や分類項目一覧表、「赤本」等を参考にし、当てはまる枠を検討する。

例え

①運動について苦手の状況の場合

→苦手意識のほうを重視する場合は主観・主体へ

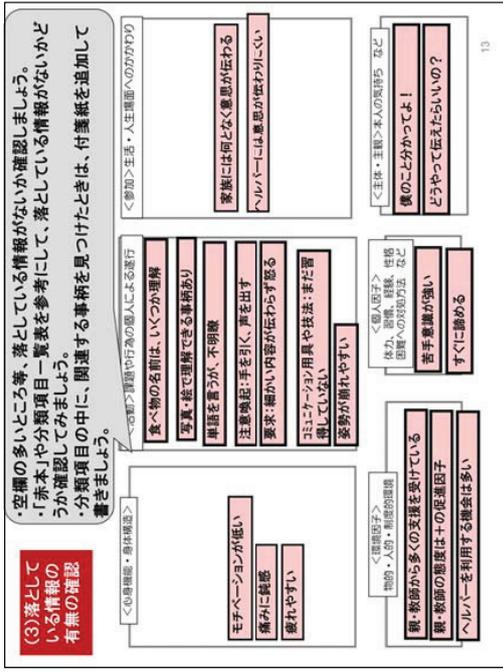
→運動全般の不器用さ等の場合は、活動へ

→機能や構造に課題がある場合は、心身機能・身体構造へ

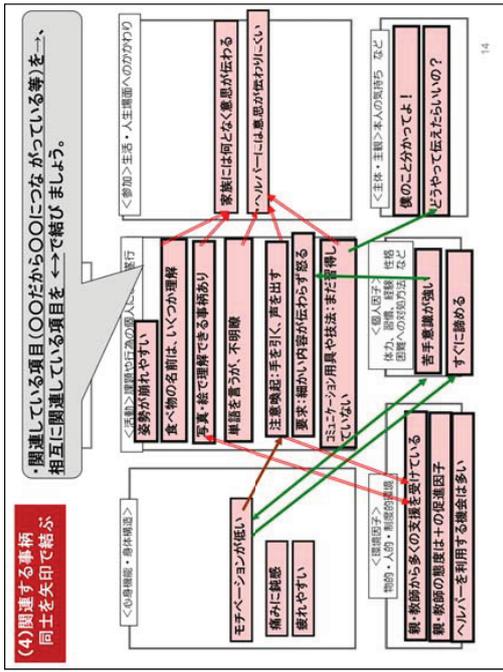
→複数のところに分けて、それぞれについて書くこともできる

②DSが好き→興味関心に関することとして 個人因子へ 等です。

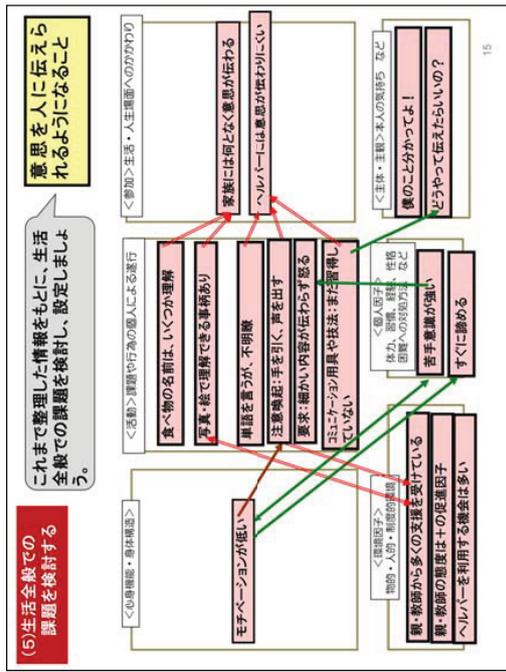
5) 付箋紙の分類時に迷う際は、どこに分類するかを考えることに労力をかけすぎず、とりあえずどこか便宜的に貼っておいて、後から行うで書いていく作業の際にあらためて考えるようにしましょう。



- (3) 落としている情報の有無の確認をします。
- ・ワークシートを埋めることが目的ではありませんが、空欄の多いところ等、落としている情報がないか確認しましょう。
  - ・「赤本」や分類項目一覧表を参考にして、落としている情報がないかどうか確認してみましょう。
  - ・分類項目の中に、関連する事柄を見つけたときは、付箋紙を追加して書きましょう。



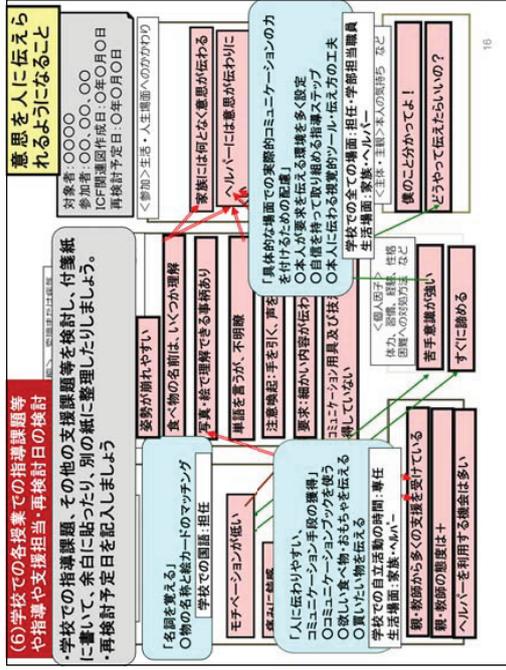
- (4) 関連する事柄同士を矢印で結びます
- ・関連している項目(〇〇だから〇〇につながっている等)を→、相互に関連している項目を↔で結びましょう。
  - ・付箋紙同士をつなぐ前に、似通った内容の付箋紙を固めて〇で囲み、小さい意味のまとまりを作ってからまとめる作業を行ってないでいいという方が使いやすい場合もあります。
  - ・この事例では、活動の欄にある「コミュニケーション/用具や技法：まだ習得していない」のために、参加の「ヘルパーには意思が伝わりにくい」が生じていると考えられ、→が引かれています。
  - また、心身機能・身体構造の欄にある「モチベーションが低い」ことと、個人因子の欄にある「苦手意識が強い」は相互に関連していると考えられ、↔で結ばれています。
  - ・分かりにくくならないように、適宜付箋紙をすらしたり、薄く鉛筆で書いてみるとよいと思われます。



(5) 生活全般での課題を検討します。

これまで整理した情報をもとに、話し合いながら、生活全般での課題を検討し、設定しましょう。

この事例では、「意思を人に伝えられるようになること」となっていますが、複数と考えられる時は、優先順位などを決めることも考えられます。



(6) 学校での各授業での指導課題等や指導や支援担当・再検討日の検討しましょう

学校での指導課題、その他の支援課題等を検討し、付箋紙に書いて、別の紙に整理しましょう。

この事例では「意思を人に伝えられるようになること」と中心的な課題に対応する具体的な指導課題として、

「名詞を覚える」という課題が考えられ、物の名称と絵カードのマッチングの学習をすることが考えられ、学校の国語の授業の中で担任が行うことになっています。

一方、ICFは生活全体を捉えるものなので、そこから導き出される課題は、学校の授業だけで扱うとは限りません。

この事例では、「人に伝わりやすい、コミュニケーション手段の獲得」という課題について、コミュニケーションブックを使う、

欲しい食べ物・おもちゃを伝える、買いたい物を伝える、といった具体的な取り組み内容が考えられ、

これらは、学校だけでなく、生活場面で家族やヘルパーとともに支援されることになっていきます。

最後に、再検討予定日を記入しましょう。

できあがった関連図は、写真にとるなどして、それぞれで共有するとよいと思われ、情報の管理には十分配慮しましょう。

## 4.4 「教育相談・巡回相談等で活用できる，主訴に基づいた ICF 関連図作成手順」の開発と実証

### I 研究の趣旨と目的

特別支援学校における ICF/ICF-CY の活用については，多様な取組があることが報告されている（松村他，2010）。その中では活用場面の一つとしてセンター的機能における教育相談での活用が 17 校あることが報告されている。関連した実践報告（国立特殊教育総合研究所，2005；国立特別支援教育総合研究所，2007；2010 他）も複数見られ，実際に教育相談の担当をしている筆者の一人，溝端は，それらの報告を参考にしてきた。それらの中では「ICF 関連図」を用いた取組が多いが，支援計画を意識したと想定される，多くの情報から実態把握をするような「ICF 関連図」の作成マニュアルは報告がある（同研究所，2007）一方，教育相談や巡回相談等で活用できるような，主訴や特定の事柄に絞った ICF 関連図の作成に関してマニュアルとして整理されたものは見あたらない。インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組が推進されようとする中，特別支援学校によるセンター的機能はますます重要となると推測されることから，その中での障害の有無にかかわらず人をとらえることのできる ICF/ICF-CY の活用は有用だと考えられる。

そこで，特別支援教育における教育相談・巡回相談等で活用できる，主訴に基づいた ICF 関連図のマニュアルを開発し，併せてより使いやすいものになるよう実証し，改善を図ることにした。

### II 方法

特別支援教育における教育相談・巡回相談等で活用できる，主訴に基づいた ICF 関連図の作成手順（以下，ICF 関連図作成手順主訴対応版（試案））を開発し，調査等を通じた実証を図り，改善を行うこととした。その手順については，以下の通りである。

1. 関連文献の検討及び ICF 関連図を活用した教育相談を行ってきた特別支援学校の特別支援教育コーディネーター（2 校，各校 1 名ずつ）を訪問し，活用の目的・方法・効果と課題点などの聞き取りによる調査の結果を通して，ICF 関連図作成手順主訴対応版（試案）を作成する。
2. 国立特別支援教育総合研究所（以下，本研究所）の専門研修員のうち，調査協力の意思にある者を対象として，質問紙による調査を実施する。
3. 「1」，「2」を踏まえて研究研修員及び研究分担者によって協議し，試案を改善する。

### III 結果

1. 教育相談や巡回相談で ICF 関連図の活用がある 2 つの特別支援学校特別支援教育コーディネーター（各校 1 名ずつ）への聞き取り調査  
聞き取った主な活用の目的・方法・効果と課題は以下の通りである。  
（1）活用の目的

- ・巡回相談での事例となる子どもの情報を整理するために活用している

## (2) 活用の方法等

- ・巡回相談の場面で子どもの情報をすぐには ICF 関連図へ記入できないので、事前に各構成要素に記入する内容を自分で考えた
- ・生育歴を記入する箇所がわかりづらかったので「ICF 関連図」の環境因子に家族関係の図を記入した
- ・ICF 関連図には時間軸（一日の流れ）での子どもの課題を記入できなかったため、参加の枠には時間軸（一日の流れ）で児童生徒の課題を記入できるように工夫した
- ・障害名の有無に着目しない子どもの実態把握のために「ICF 関連図」の様式を工夫した（図 1）
- ・参加の枠に、子どもの願いを記入した後、情報整理を行った
- ・情報整理には時間を要するので全ての事例には活用していない

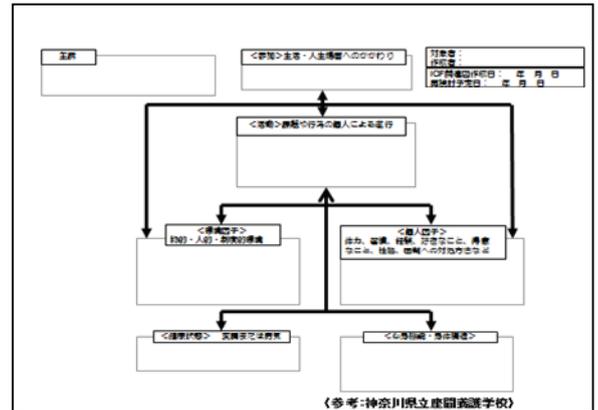


図 1 工夫した ICF 関連図の様式

## (3) 活用の効果

- ・事前に ICF 関連図で情報を整理したことで、巡回相談の授業等の観察場面で注目すべき情報や追加で必要な情報等が明確になった
- ・各構成要素に記入する内容を予め自分で考えていたことで、記入する内容がわかりやすく情報の整理がしやすくなった
- ・工夫した ICF 関連図（図 1）を活用して上から下に記入していくことで情報の整理がしやすくなった

## (4) 活用の課題

- ・話し合いの中で ICF 関連図を活用し、子どもの情報を共通理解することに難しさがある
- ・ICF 関連図には子どもの時間軸（1 日の流れ）での課題が記入できない

## 2. 本研究所の専門研修員を対象とした調査

調査の趣旨に理解を示し、調査用紙を配布したのは 19 名、回答のあった者は 13 名、回収率は、68.4%であった。得られた回答について、肯定的な内容と否定的な内容に分けた結果の概要は以下の通りである。

### (1) 肯定的な回答

- ・わかりやすい
- ・ICF 関連図作成を通して、背景や支援の方向性を探ることは有効と考えられる
- ・付箋紙への対象児の情報の書き出しは比較的容易である
- ・ICF 関連図を活用した情報の整理例の資料はわかりやすい

### (2) 否定的な回答

- ・ICF 関連図作成作業が難しい
- ・付箋紙に書き出す時に分類項目一覧表を参考にすることが難しい
- ・ワークシート上での付箋紙の分類が難しい
- ・関連する項目の整理が難しい

- ・目標を達成するための課題を検討することが難しい
- ・指導課題，指導や支援を分担することが難しい
- ・指導課題，指導や支援の再検討項目等を決めることが難しい
- ・作成された関連図が見つからない

### 3. 研究所内研究グループでの検討

研究研修員及び研究分担者で協議した主な内容については以下の通りである。

- ・教育相談や巡回相談では主訴が明確でない場合が多く，その時には主訴を明確にすることが大切だと考えられる
- ・教育相談や巡回相談で対象児／者に合わせて情報を聞き出すことが必要である
- ・今まで得られた意見等を踏まえ，学校現場等で使いやすい作成手順として改善する必要がある

## IV 考察

学校での聞き取り調査等から，教育相談や巡回相談での ICF 関連図の活用は，対象となる子どもの情報を整理したり，共通理解を図ったりするために活用されていることが確認された。作成手順主訴対応版（試案）を活用して情報を整理する際にも，通常行われている教育相談と同様に対象児／者の主訴に合わせて情報を聞きとりながら整理することが前提となることが確認された。

また，ICF 関連図作成手順主訴対応版（試案）の有効性として，①事前に子どもの情報を整理すること，②授業等の観察場面で注目すべき情報や追加すべき情報等を明確化すること，③ワークシートの工夫により情報を順序立てて整理すること，等についてそれぞれ有効であることが確認された。

活用の方法の工夫としては，①これまで使われてきた ICF 関連図にはない時間軸（1日の流れ）を追加すること，②参加の枠に子どもの願いを記入すること等のワークシートの様式の工夫，それぞれが確認された。また，ICF 関連図の構成要素毎に情報を整理する作業のわかりにくさへの対応としては，①記入する内容を予め考えて活用すること，②ICF/ICF-CY の分類項目を参考にすること，がそれぞれが考えられる。一方で，分類項目を参考にすることが難しさの指摘もあった。冊子の ICF/ICF-CY の分類項目をそのまま使うと量的な多さが負担になる可能性があるため，「4.5」で述べている ICF-CY チェックリストを活用することも有効な手だての一つと考えられる。さらに，収集した情報を整理するために情報整理例も有効だと考えられた。

活用上の課題として，ICF/ICF-CY を理解していないと活用が難しいことが挙げられた。ICF/ICF-CY に関する知識の不十分さは，ICF 関連図ワークシート上で，付箋紙を分類することや付箋紙を線で結んで関連づけるところで，特に難しくなると推察された。その一方で ICF 関連図作成作業を通して ICF/ICF-CY への理解がより深まるとも考えられることから，作成作業を取り入れた研修がより効果的且つ実地的だと考えられた。

その他の課題として，一定程度の情報量の確保と情報整理のための時間の確保が指摘された。このことへの有効な手だての一つは，ある程度の「慣れ」だと考えられた。そのことにより，必要な情報を的確に得ることができるようになり，作業が効率よく短時間でできるようになる。したがって，そこに至るまでのいわゆる「ハードル」を下げるためにも，手順のさらなる改善が必要だと考えられる。また，より実践に寄与するために，ICF 関連図上への子どもの時間軸（1日の流れ）の記入

の必要性が考えられた。このことも含めて今後活用を通して実証し、改善を図っていく必要がある。

## V 特別支援教育における教育相談・巡回相談等で活用できる主訴に基づいた ICF 関連図作成手順の概要

以上の手続き及び「5. 5」で述べている実証を踏まえて「特別支援教育における教育相談・巡回相談等で活用できる主訴に基づいた ICF 関連図作成手順（試案 Ver.2）」を作成した。実際の資料は別紙のとおりであるが、その概要として、おおまかな活用の順序について以下に示した。

### 1. 担当者が対象児／者の情報を整理する段階

- (1) 主訴を付箋紙に記入し、付箋紙の欄に貼る。
- (2) 主訴に基づいて、対象児／者の願い、或いはなっって欲しい姿等を具体的に付箋紙に記入し、「参加」に貼る。(以下、最終目標とする)
- (3) 最終目標に関連する事柄を事前の情報から抜き出して、付箋紙に記入する。
- (4) 付箋紙を ICF 関連図のワークシートに分類する。
- (5) 関連する付箋紙の事柄を矢印で結ぶ。
- (6) 子どもの観察で得られた情報から、主訴に関連する情報を付箋紙に書き出す。
- (7) 書き出した付箋紙を事前に作成した ICF 関連図に追加し、分類する。
- (8) 再度、関連する付箋紙の事柄を矢印で結ぶ。
- (9) 主訴に関する対象児／者の背景情報から課題を導き出す。

### 2. 担当者が対象児／者の情報を整理する段階

- (1) 担当者が作成した ICF 関連図を提示し、主訴に関する子どもの背景情報を関係者で検討し、共通理解する。
- (2) 関係者で対象児／者の課題を検討し、現在の目標を付箋紙に書いて ICF 関連図に貼り、共通理解する。
- (3) 目標が決まったところで、関係者が指導内容、指導方法、支援方法を検討し、付箋紙に書き出して貼り、共通理解する。
- (4) 関係者で指導方法・支援方法の役割分担をし、共通理解する。
- (5) 次回の再検討日等を決める。

## VI 最後に

今回、これまで実践報告はあったものの、手順として整理されていなかった教育相談や巡回相談での ICF 関連図作成のための手順を作成することができた。試案の段階での調査等を通して、子どもの情報を整理し、支援の方向性を検討することへの有効性が確認された。より実践で使いやすい者とするために、実際場面での活用を通して、今回課題とされた点も含めて検討し、改善を図っていききたい。

(溝端英二，徳永亜希雄)

## 文献

1. 国立特殊教育総合研究所・世界保健機関 (WHO) (2005). ICF 活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー. ジアース教育新社.
2. 国立特別支援教育総合研究所 (2007). ICF 及び ICF-CY の活用ー試みから実践へー. ジアース教育新社.
3. 国立特別支援教育総合研究所 (2010). 「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際的研究」成果報告書.

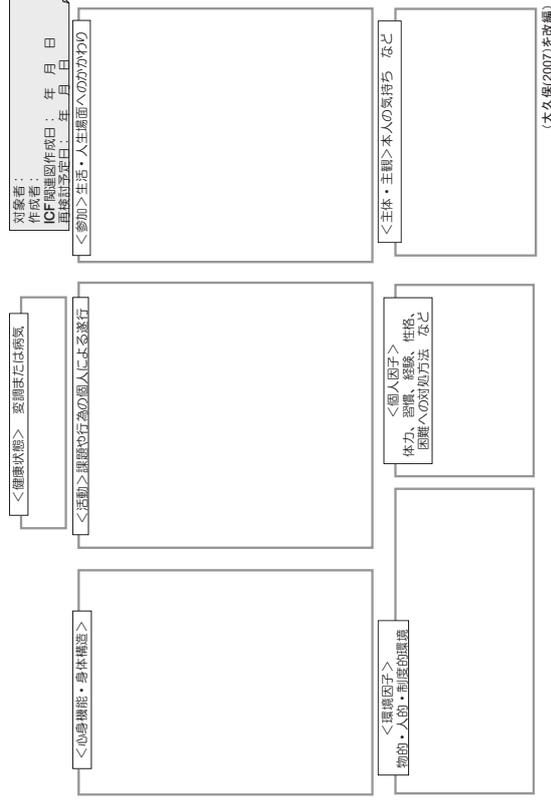
4. 松村勘由・加福千佳子・徳永亜希雄・小林幸子(2010). 特別支援学校における ICF 及び ICF-CY についての認知度・活用状況等に関する調査のまとめ（最終報告）. 国立特別支援教育総合研究所 Web サイト.  
[http://www.nise.go.jp/PDF/H21kenkyu\\_ICFCY\\_chousamatome\\_end](http://www.nise.go.jp/PDF/H21kenkyu_ICFCY_chousamatome_end)
5. 世界保健機関（WHO）（2009）. ICF-CY 国際生活機能分類－児童版－. 厚生労働省大臣官房統計情報部.

## 教育相談・巡回相談等で活用できる、主訴に基づいたICF関連図作成手順について (試案) ver.2



国立特別支援教育総合研究所 専門研究A  
 「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する研究  
 ―活用のための方法試案の実証と普及を中心に―」  
 主担当 研究研修員 溝端 英二  
 副担当 研究代表 徳永甲希雄  
 H23.12.25

### ICF関連図ワークシート例1



### 「ICF関連図」とは

- ICFの概念図を模した図に対象児/者の情報を整理して、個々の情報、情報間の関連などを検討するための図。
- ICFには含まれない本人の気持ち(「主観・主体」等)を付加されたものが多い。
- 多くの情報を盛り込み、実態把握などに使われる通称「全体図」、ある特定の内容の実態にしばったり、特定のゴールを想定したりして、ケース会議等で使われる通称「部分図」等がある。

### 続：「ICF関連図」とは

- その中から対象児/者の課題(≠できないこと)や指導/支援の手がかりを検討する等に使われることが多い。
- 話し合いのツールとして使われたり、引き継ぎのための資料として使われたり、それらが併用されたりする。
- ICFチェックリスト等での評価後に作成されたり、今ある情報から作成されたりする。

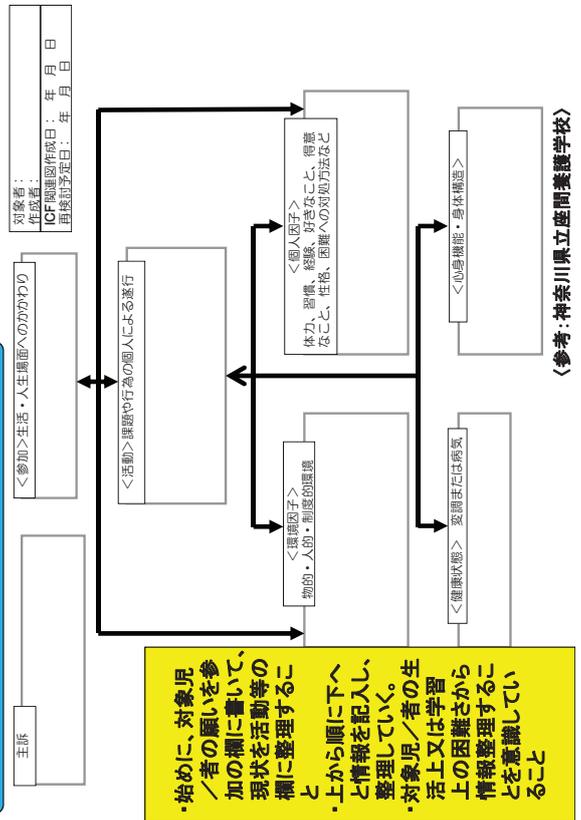
## 教育相談・巡回相談等でのICF関連図の活用

- 相談活動において、担当者が対象児／者の情報を集めることや情報を整理すること等に活用されている。
- 関係者に作成したICF関連図を提示し、課題や指導／支援の手がかりを検討する等に活用されている。

## ICF関連図ワークショップ例 2



## ICF関連図ワークショップ例 3



＜参考：神奈川県立盛岡養護学校＞

## 今回の「ICF関連図」作成の目的

教育相談・巡回相談等において担当者がICF及びICF-CYを活用し、主訴に基づいた対象児／者の情報の整理や課題解決に向けた検討をすること

## 準備する物

- 「ICF関連図」のワークショップ(A3版)の大きさに合わせて拡大する。
- 付箋紙 (1×5センチくらいのも)
- ICFの分類項目が分かるもの(「赤本」、分類項目一覧表など)
- 鉛筆、消しゴム

線が重なって見えにくくなることを防ぐ

## 「ICF関連図」作成の段階

○教育相談・巡回相談等の担当者が対象児／者の情報を集めること、整理する段階のICF関連図作成

○関係者に作成したICF関連図を提示し、課題や指導／支援の手がかりを検討する段階のICF関連図作成

## 「ICF関連図」具体的な作成の流れⅠ

### 担当者が対象児／者の情報を整理する段階

- (1) 主訴を付箋紙に記入し、付箋紙の欄に貼る。
- 
- (2) 主訴に基づいて、対象児／者の願い、或いはなつて欲しい姿等を具体的に付箋紙に記入し、「参加」に貼る。(以下、最終目標とする)
- 
- (3) 最終目標に関連する事柄を事前の情報から抜き出して、付箋紙に記入する。

・主訴がはっきりしていない場合は、相談者との情報を収集する段階で、主訴を明確にしておくこと(ICFを活用した情報の整理例を参照)

## 「ICF関連図」具体的な作成の流れⅡ

(4) 付箋紙をICF関連図のワークシートに分類する。

(5) 関連する付箋紙の事柄を矢印で結ぶ。

・事前情報の整理段階での対象児／者の実態や課題が見えてくること  
・不足している情報や子どもの実際の観察時のポイント、関係者への聞き取り内容等が明らかになること

(6) 子どもの観察で得られた情報から、主訴に関連する情報を付箋紙に書き出す。

## 「ICF関連図」具体的な作成の流れⅢ

(7) 書き出した付箋紙を事前に作成したICF関連図に追加し、分類する。

(8) 再度、関連する付箋紙の事柄を矢印で結ぶ。

・対象児／者の実態や課題が見えてくること  
・不足している情報があれば、協議場面で関係者への聞き取り、その場で付箋紙に書いてICF関連図に貼っていくこと

(9) 主訴に関する対象児／者の背景情報から課題を導き出す。

担当者が作成したICF関連図を提示して関係者で検討する場合もある。

## 「ICF関連図」 具体的な作成の流れⅣ

担当者が作成したICF関連図を提示して関係者で検討する段階

(1) 担当者が作成したICF関連図を提示し、主訴に関する子どももの背景情報を関係者で検討し、共通理解する。

新たな情報が出てきたら、付箋紙に書いて貼る。

・目標をもとに実態を捉えるときに、関係者が対象児／者以外の課題に気づくために、対象児／者の気持ち(主体・主観)を考えること

(2) 関係者で対象児／者の課題を検討し、現在の目標を付箋紙に書いてICF関連図に貼り、共通理解する。

工夫：付箋紙の色を変えること、別のICF関連図に貼ること

## 「ICF関連図」 具体的な作成の流れⅤ

(3) 目標が決まったところで、関係者が指導内容、指導方法、支援方法を検討し、付箋紙に書き出して貼り、共通理解する。

・具体的な評価の視点についても確認しておくこと

(4) 関係者で指導方法・支援方法の役割分担をし、共通理解する。

いつから、誰が、どのような場面で、何を、どのような方法でどうするかを明確にする。

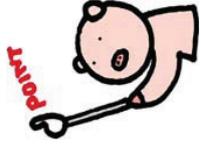
・関係者で指導内容、指導方法、支援方法の役割分担をすることで、対象児／者をみんなで支援していくことができること  
・関係機関との連携が必要な場合は、早急に関係機関と連絡を取り、繋げていくこと

## 「ICF関連図」 具体的な作成の流れⅥ

(5) 次回の再検討日等を決める。

・後日必ず、目標、指導内容、指導方法、支援方法について評価すること  
・毎日の指導観察の中で再検討日を待たずに実態、課題、目標、指導内容、指導方法、支援方法の変更があるかも知れません。その時は、必要に応じて検討すること

実際の「ICF関連図」の作成例  
を見てみましょう



# 仮想事例

☆小学生の4年生のA君。男の子。通常学級に在籍  
 家族4人(父、母、弟)の活動には元気がいっぱい参加し、勉強や遊びでもやる気満々な児童です。  
 やる気はあふれるので、よく友達とトランプにしたり、勉強も、消しゴムを貸したとか返さないとか、休憩時間も仲良くサッカーをしています。  
 間にか友達と遊びたいようですが、最近、ケンカにA君は、友だちと遊びたいようですが、最近、ケンカに遊ぶことが嫌になってきました。  
 お母さんに家でケンカを何うと、家でも弟とゲームを勝手にお母さんがA君を怒っています。  
 母さんがA君を怒っています。

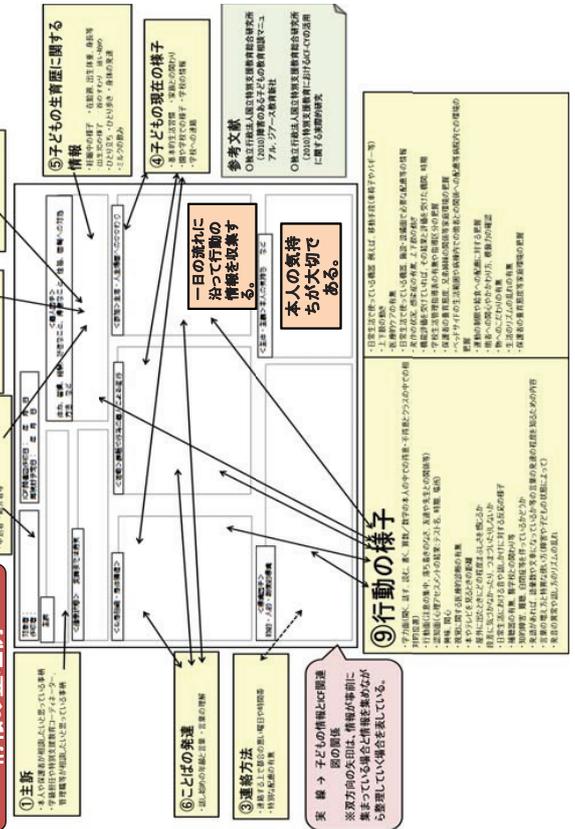
# 情報収集で気をつけること

☆対象児／者に合わせて情報を聞き出すこと

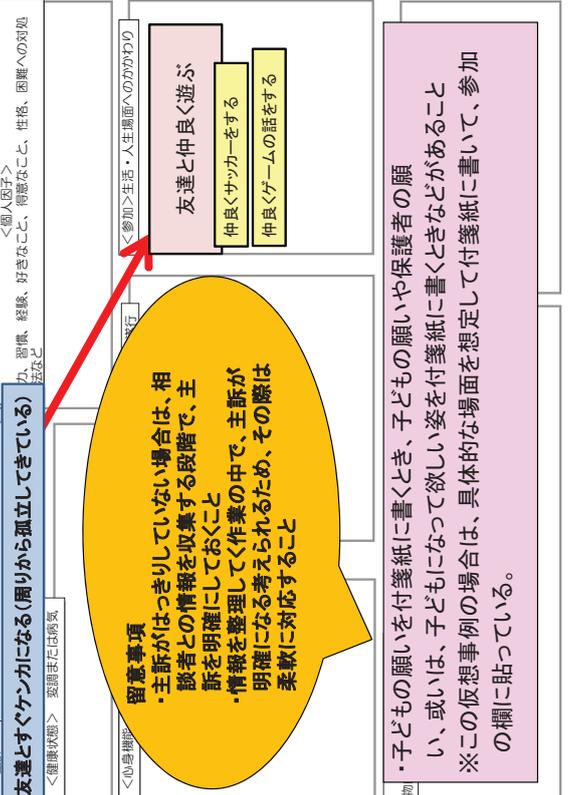
# 情報収集の内容

- ・ 情報収集の内容は、行動面、言語面、社会面等について学校での様子や家庭生活・地域生活での様子を具体的に収集すること
- ・ 対象児／者を取りまき環境資源について収集すること
- ・ 学校規模、校内の支援体制、管理職の学校運営方針、学校の雰囲気、教室や学校の物理的環境、相談者の特別支援教育を含む経験年数や教育観等も収集すること

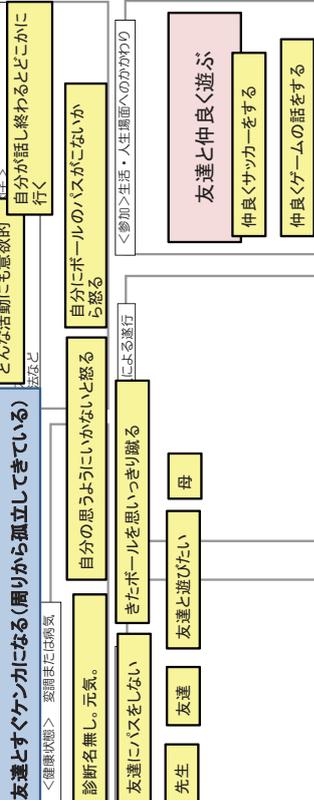
# ICF関連図を活用した情報の整理例



# 担当者が対象児／者の情報を整理する段階 (1)・(2)

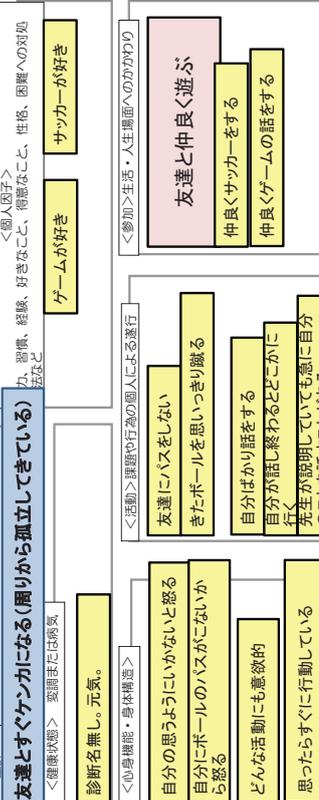


### 担当者が対象児／者の情報を整理する段階 (3)



- ・ 目標に関連する事柄に絞って、実態を付箋紙に書くこと
- ・ できていることやできていないことも含めて目標に関係する情報を付箋紙に書くこと
- ・ 学校だけの様子ではなく、家庭での様子も分かっていたら付箋紙に書くこと
- ・ 主訴に関する子どもの気持ちを付箋紙に書くこと
- ・ 付箋紙には、具体的に、短く書くこと(付箋紙に書き出すときの留意点参照)

### 担当者が対象児／者の情報を整理する段階 (4)



- ・ 活動と参加など分類することに悩む項目は、とりあえずどちらかに分類しておくこと
  - ・ ICF及びICF-CYの分類項目を参考にすること
  - ・ 構成要素内での同じ内容の付箋紙は、近くに貼ること
- 活動：課題や行為の個人による遂行のこと**  
**参加：生活・人生場面への関わり**

### 付箋紙に書き出すときの留意点

- 一枚の付箋には一つの情報を短く書く。  
例) ○ 姉の側を離れない 面倒見の良い優しい姉  
× 姉が面倒見がよく優しいので、  
 姉の側を離れようとしてない。  
●難しいこと、苦手なこと等のマイナス面だけでなく、  
できること、得意なこと等のプラスの面も含めて書く。  
●場面によって違いがあるような時は、本人の様子と共  
に状況に関する情報を書く。(※後でそれらを線で結ぶ)  
例) 集中して学習に取り組む 取り出し指導  
 落ち着きがない 縦割り学習

### (参考) ICFの各次元・要素の定義・内容等

- 心身機能**: 身体系の生理的機能(心理的機能を含む)  
**身体構造**: 器官、肢体とその構成部分などの、身体の解剖学的部分  
**活動**: 課題や行為の個人による遂行  
**参加**: 生活・人生場面への関わり  
(※「参加」と「活動」の項目は分けられていません)  
**環境因子**: 人々が生活し、人生を送っている物的・社会的・態度的環境(※マイナスである阻害因子だけでなく、プラスとなる促進因子にもなりえます)  
**個人因子**: 個人の人生や生活の特別な背景(※具体的な分類項目はありません)

※主体・主観: 本人の気持ち (←本来ICFには含まれません)

## 付箋紙を分類する際の留意点

- 誰かが進行役になりながら、話し合いを進める。
  - 一人が一つの付箋紙を読みあげながら、構成要素の枠に分類する。同じ内容が書かれた付箋紙があるときは、自分も同じであることを伝え、その付箋紙と重ねて貼る。
  - 付箋紙に同じ内容が書かれていても、状況等の捉えた場面が違ってもあるので、付箋紙の内容を書いた理由の説明を加えてもよい。
  - 分類の際はスライドにある定義や分類項目一覧表、「赤本」等を参考にし、当てはまる枠を検討する。
- 例) ①運動について苦手の状況の場合
- 苦手意識のほうを重視する場合は主観・主体へ
  - 運動全般の不器用さ等の場合は、活動へ
  - 機能や構造に課題がある場合は、心身機能・身体構造へ
  - 種数のところに分けて、それぞれについて書くこともできる
- ②DSが好き→興味関心に関するとして 個人因子へ
- 付箋紙の分類時に迷う際は、どこか便宜的に貼っておいて、後から行うで繋いでいく作業の際にあらためて考える。(※どこに分類するかを考えると労力をかけすぎない。)

## 例えば

ICF関連図作成日： 年 月 日  
再検討予定日： 年 月 日

友達とすぐケンカになる(周りから孤立してきている) 個人因子  
九、習慣、経験、好きなこと、得意なこと、性格、困難への対応方法など

診断名無し、元氣。  
健康状態 変調または病氣

＜心身機能・身体構造＞  
 ゲームが好き  
 サッカーが好き  
 友達と仲良く遊ぶ  
 サッカーをする

＜活動＞課題や行為の個人による遂行  
 友達にパスをしない  
 友達にパスをしない  
 自分がボールを思いっきり蹴る  
 自分がボールを思いっきり蹴る

＜環境因子＞  
 先生  
 友達  
 母  
 友達と遊びたい

＜主観・主体＞本人の気持ち など

● サッカーが好きだからサッカーをしている。  
 ● サッカーをするが、友達にパスをできなかったり、自分のところにきたボールを思いっきり蹴る。  
 ● 友達にパスをしないのは、自分にボールのパスがこないから怒っている。  
 ● 友達にパスをしないけど、サッカーが好きだからサッカーをしている。  
 ● 自分の思うようにならないと怒るから自分にボールのパスがこないから怒る。  
 ● このときに子どもはどのような気持ちなんだろう？  
 ● サッカーをしていて自分にボールのパスがくるものと思っていないだろうか？  
 ● もしそうだとしたら、サッカーとは何か仕組みについて理解してもらおうことが大切かもしれない。

等を考えながら付箋紙を線でつないでいく。

## 担当者が対象児／者の情報を整理する段階 (5)

友達とすぐケンカになる(周りから孤立してきている) 個人因子  
九、習慣、経験、好きなこと、得意なこと、性格、困難への対応方法など

診断名無し、元氣。  
健康状態 変調または病氣

＜心身機能・身体構造＞  
 ゲームが好き  
 サッカーが好き  
 友達と仲良く遊ぶ  
 サッカーをする  
 ゲームの話をする

＜活動＞課題や行為の個人による遂行  
 友達にパスをしない  
 友達にパスをしない  
 自分がボールを思いっきり蹴る  
 自分がボールを思いっきり蹴る

＜環境因子＞  
 先生  
 友達  
 母  
 友達と遊びたい

＜主観・主体＞本人の気持ち など

留意事項  
 「なぜ〇〇なのか」「〇〇は△△の付箋紙と関係している」「この〇〇のとき、子どもはどのような気持ち(願望)はどうか」等を考えながら繋いでいくこと

● 目標に関連する付箋紙を繋いでいくこと  
 ● 追加の情報や現在の情報をより具体的に書くことができるときは、新たに付箋紙に書いて貼ること  
 ● 線で結ばない項目は、後ほど関連した情報を収集し、新たに付箋紙に書いて追加すること

## 担当者が対象児／者の情報を整理する段階 (6)(7)(8)(9)

友達とすぐケンカになる(周りから孤立してきている) 個人因子  
九、習慣、経験、好きなこと、得意なこと、性格、困難への対応方法など

診断名無し、元氣。  
健康状態 変調または病氣

＜心身機能・身体構造＞  
 ゲームが好き  
 サッカーが好き  
 友達と仲良く遊ぶ  
 サッカーをする  
 ゲームの話をする

＜活動＞課題や行為の個人による遂行  
 友達にパスをしない  
 友達にパスをしない  
 自分がボールを思いっきり蹴る  
 自分がボールを思いっきり蹴る

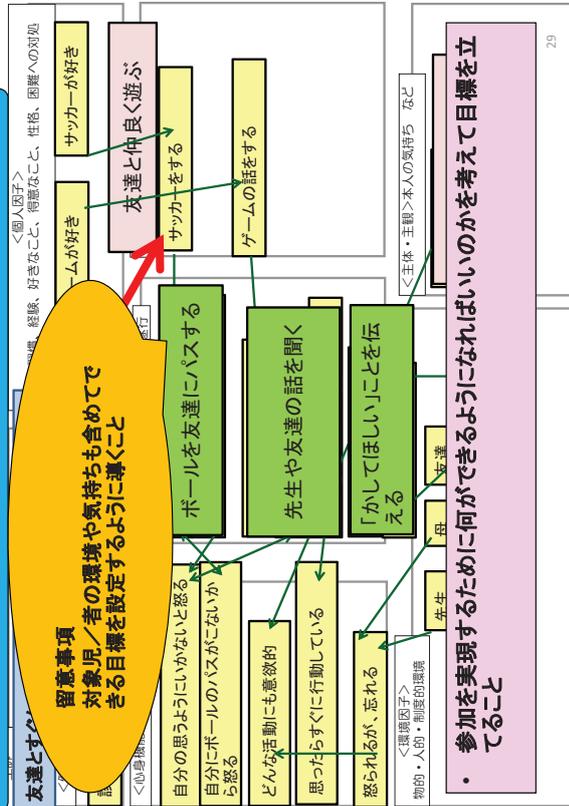
＜環境因子＞  
 先生  
 友達  
 母  
 友達と遊びたい

＜主観・主体＞本人の気持ち など

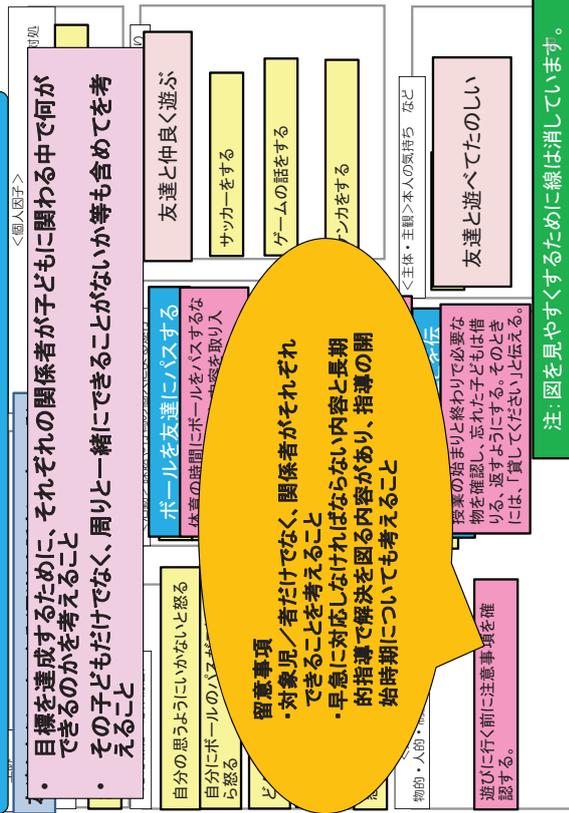
留意事項  
 関係者が検討する時は、対象児／者にあわせて、対象児／者が主体的に考えられるように話し合いを進めること

● 事前の情報、実際の観察場面でもとれない情報は、協議会や協議会前に情報を収集し、付箋紙に書いてICF関連図に貼り、線で繋ぐこと

担当者が作成したICF関連図を提示して関係者で検討する段階(2)



担当者が作成したICF関連図を提示して関係者で検討する段階(3)



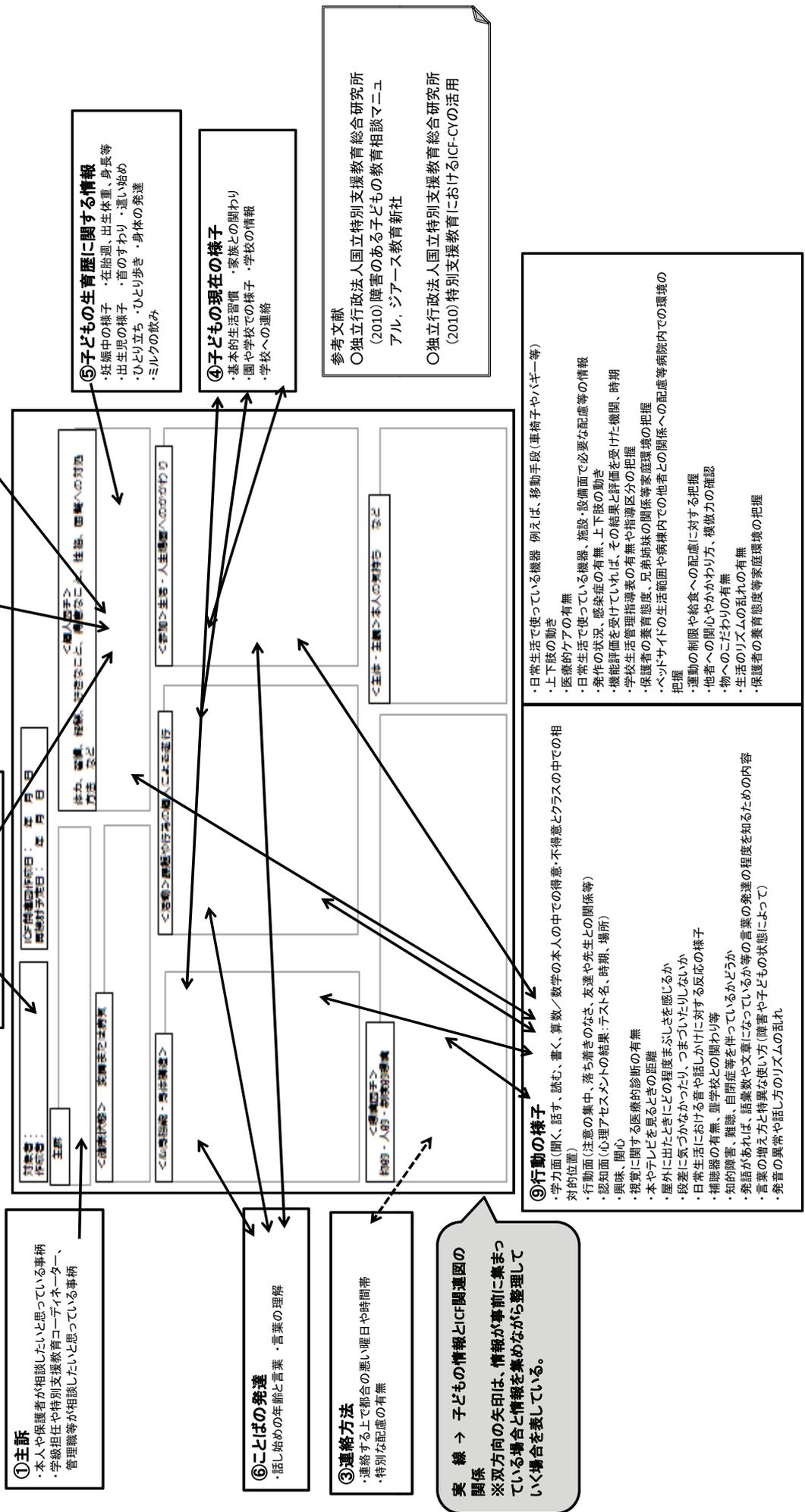
担当者が作成したICF関連図を提示して関係者で検討する段階(4)

例えば...

目標	時期	指導する人	指導場面	指導内容	指導方法	支援方法
することできること ボールを友達にパスする	いつから 次の	誰が	どのような場面	何を使って	どうする	どうする
友達や先生の話を聞く。						
交代で行うゲームができる	2週間後に	校長先生が	屋休みに	オセロゲームを使って順番にコマをおく。	相手がコマを置くのを待つ。	始めはテンポ良く行うが、徐々に考えるようにして待つ時間を作っていく。

**留意事項**  
・ 関係者に対象児／者を含めたチームで解決する意識を持ってもらうこと  
・ 再検討日に明確な評価の視点で話し合うために関係者で確認しておくこと

# ICF関連図を活用した 情報の整理例



**実線** → 子どもの情報とICF関連図の関係  
**※** 双方向の矢印は、情報が事前に集まっている場合と情報を集めながら整理していく場合を表している。

## 4.5 ICF-CY チェックリストの開発と実証—個々の「学習上又は生活上の困難」を把握するために—

### I 趣旨と目的

これまでの ICF/ICF-CY を活用する実践報告の中では、ICF/ICF-CY の項目によるチェックリストを初期評価に用いたり、既存の子どもの情報を「ICF 関連図」等で整理した後に、見落としがないかを確認するために用いたりすることを通して実態や課題を整理する取組が散見される。生きることの全体像（大川，2007）とされる ICF の分類項目は、見落としなく全体像をつかむためのチェックリストとして役立つとされる（上田，2005）。1,400 を超える項目を有する ICF の実際の活用の手だてとして、WHO からはデータセット例やチェックリストが示され、また、目的別の項目のセットについての研究成果も報告されているが（Stucki et al., 2003 等）、それらは疾患別等の医療ベースのものが多く、特別支援教育にそのまま持ち込むにはなじまない。また、ICF-CY では 200 以上の項目が追加拡充されているため、さらなる工夫が必要と考えられる。日本の特別支援教育においても WHO のチェックリストを修正して活用する等の取組が見られるが、定量的な開発手続きが明示されたものは見当たらない。一方、文部科学省（2009）は「障害による学習上又は生活上の困難」について、ICF との関連でとらえることの必要性について述べている。

そこで、本研究の前身となる「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際研究（平成 20 年（2008 年）～21 年（2009 年）度）」（以下、前研究）においては、ICF よりも項目が充実した ICF-CY を用いたチェックリストは、個々の学習上又は生活上の困難を把握するのに役に立つものと考え、その開発について検討し、調査の数値結果に基づいた項目抽出について第 1 報として報告した（徳永，2010）。

本研究では、企画段階から参画した ICF-CY、ICF チェックリストの実践的活用、発達検査等の開発手続きに精通した者 5 名による協議を通して、より特別支援教育実践に役立つ項目として検討し、整理することにした。

### II 方法

#### 1. 前研究における調査全体の方法の概要

ICF-CY 第 2 分類の合計 283 の項目について個々の「学習上又は生活上の困難」を把握するためのチェックリストの項目としての必要度等について、0～100 の線上に印を記入するビジュアルアナログスケール（以下、VAS）を用いた調査票を通して尋ねた。詳細は、以下の通りである。

##### （1）調査対象

国立特別支援教育総合研究所の ICF-CY 関連研究等にこれまで研究協力をしたことのある者や、同研究所職員が講師を務めた ICF-CY 関連研修の参加者等とその者の紹介者で、ある程度 ICF-CY について知識がある者。

## (2)調査期間

平成 21 年(2009 年)8~10 月。

## (3)調査内容

回答者及び回答者が回答の際に想定した事例の属性及び各項目(心身機能(以下, b), 身体構造(以下, s), 活動と参加(以下, d), 環境因子以下, e)の必要度等について問う調査票について, 回答者が電子化版又はテキスト版を選択して回答した。それぞれの内容は以下の通りである。

\* 想定した事例: 在籍機関, 障害種別等。

\* 回答者: 職種, 教職経験年数, 障害種別等。

\* 必要度等: 想定事例の「学習上又は生活上の困難」を大まかに把握するための項目として必要度。回答には横幅 10 cm の VAS を用い, 「必要でない(無視できる)」から「必要である」までの線分上に感覚的な回答の記入を求めた。また, 該当項目が不要かどうか, 項目の意味がわかりづらいかどうかについても尋ねた。

## (4) 調査票の授受

回答者及び回答窓口担当者に対して, 手渡し・email 添付・郵送のいずれかの方法で調査票を届け, 調査の趣旨及び方法について, 直接・電話・email のいずれかで説明した。

## (5) 調査票等

Microsoft 社の Excel で作成した電子化版と紙ベースのテキスト版の調査票を用意し, 回答者が回答方法を選択した。電子化版・テキスト版ともに各項目の定義が分かるような設定にし(定義がない s は除く), 併せて説明資料等も配布した。

## (6) VAS の計測

電子化版については自動的に 2mm 毎の数値が出るように設定(回答者には見えない設定)し, テキスト版については定規で 2 mm 毎の計測をし, 端数は切り上げた。VAS=2 以上を「必要の程度」とし, VAS=0 は「不要」とした。

## (7) 分析

第 1 に b:83 項目, s:40 項目, d:96 項目, e:64 項目, 合計 283 項目それぞれの VAS による「必要の程度」の中央値, および「不要」とされた度数を算出した。第 2 に, b, s, d, e のそれぞれの項目群での「必要の程度」の中央値の平均値および「不要」の度数の平均値を算出した。第 3 に, チェックリスト試案の作成のための項目抽出として, それぞれの項目群からできるだけ均等に項目抽出を行うことができるように, 各項目群内で「必要の程度」が一定以上高く, 「不要」の度数が一定以上低い項目を抽出することとし, 1) 項目の「必要の程度」の中央値が項目群の中央値の平均値よりも高い, 2) 項目の「不要」の度数が項目群の「不要」の平均値よりも低い, のいずれかに該当する項目を抽出した。

## 2. 本研究における項目検討に関する方法

前研究において報告した項目のセットについて, 企画段階から参画した ICF-CY, ICF チェックリストの実践的活用, 発達検査等の開発手続きに精通した者 5 名によって, 回答者の基本属性等からあらためて検討を行い, より特別支援教育実践に役立つ項目と

して検討し，整理することにした。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 前研究における結果と考察の概要

計 85 の学校等及び研究協力者・本研究所の研究研修員を対象とした結果，72 の学校等から回答があり，合計 353 件の調査票を回収した（有効回答=351 件）。VAS による「必要の程度」の中央値の平均値は，b：71.78，s：46.55，d：81.59，e：59.84 となった。「不要（VAS=0）」の回答頻度の平均値は，b：62.36，s：120.98，d：48.60，e：92.19 だった。結果，b：83 項目中 54 項目，s：40 項目中 24 項目，d：96 項目中 73 項目，e：64 項目中 31 項目，合計 182 項目が抽出された（表 1）。

#### 2. 本研究における結果と考察の概要

前研究において報告した項目のセットについて，前述の 5 名で検討した結果，想定事例及び回答者の属性から視覚障害や聴覚障害にかかわるデータ数が相対的に少なかったことから b，s，e の視覚障害に関連すると考えられる項目，d の聴覚障害に関連すると考えられる項目等 12 項目を加えたり，逆に肢体不自由にかかわるデータ数の相対的な多さを踏まえて b における関連する項目 6 項目を精選したりする作業を行った。その結果，b：49 項目，s：27 項目，d：79 項目，e：33 項目，合計 188 項目が抽出された（表 2）。

本研究では，まずは特別支援教育全体での活用を想定した汎用性の高いチェックリストとして，取りこぼしの少ない項目のセットのための 188 項目を抽出した。しかし，研究協力者や学会発表時の意見等から，この項目数は実用性という点ではまだ課題が残されていると考えられ，多様な視点を持ちながらさらに選定を進める必要があると考えられる。また，同様に，これらの項目と自立活動の内容等との整合性についての指摘もまま見られた。このことについては，「10.1」において検討結果を述べているので参照されたい。

最も重要な実践へ寄与という観点から，「4.6」で述べた，本研究所で開発した活用支援電子化ツールに実装し，学校現場等で実証する必要があると考えられる。特別支援学校における実証事例について「5.6」及び「5.8」で報告しているので，併せて参照されたい。今後，さらに検討を進め，より実用性の高いものにしていきたい。

（徳永亜希雄，小林幸子，田中浩二，大関毅，川口ときわ，  
二階堂悟，溝端英二，松村勘由，加福千佳子）

### 文献

1. 大川弥生(2007). 生活機能とは何か－ICF：国際生活機能分類の理解と活用－. 東京大学出版会.
2. Stucki G. et al (2003). Value and application of the ICF in rehabilitation medicine. DISABILITY AND REHABILITATION, Vol. 25, No 11-12

3. 徳永亜希雄・小林幸子・田中浩二・松村勘由・加福千佳子(2010). 特別支援教育における ICF-CY チェックリスト開発の試みー学習上又は生活上の困難を把握するための項目の抽出を中心にー. 国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際的研究」成果報告書.
4. 上田敏(2005). 国際生活機能分類 ICF の理解と活用 人が「生きること」「生きることの困難 (障害)」をどうとらえるか. きょうされん.

表1 抽出した分類項目の一覧(1回目)

心身機能	身体構造	活動と参加	環境因子
b110意識機能	s110脳の構造	d110注意して視ること	e110個人消費用の製品や物質
b114見当識機能	s120脊髄と関連部位の構造	d115注意して聞くこと	e115日常生活における個人用の製品と用具
b117知的機能	s140交感神経系の構造	d120その他の目的のある感覚	e120個人的な屋内外の移動と交通のための製品と用具
b122全般的な心理社会的機能	s150副交感神経系の構造	d130模倣	e125コミュニケーション用の製品と用具
b125素質と個人特有の機能	s240外耳の構造	d131物品を使うことを通しての学習	e130教育用の製品と用具
b126気質と人格の機能	s250中耳の構造	d132情報の獲得	e140文化・レクリエーション・スポーツ用の製品と用具
b130活力と欲動の機能	s260内耳の構造	d133言語の習得	e250音
b134睡眠機能	s310鼻の構造	d134付加的言語の習得	e310家族
b140注意機能	s320口の構造	d135反復	e315親族
b144記憶機能	s330咽頭の構造	d137概念の習得	e320友人
b147精神運動機能	s340喉頭の構造	d140読むことの学習	e325知人・仲間・同僚・隣人・コミュニティの成員
b152情動機能	s420免疫系の構造	d145書くことの学習	e330権限を持つ立場にある人々
b156知覚機能	s430呼吸器系の構造	d150計算の学習	e340対人サービス提供者
b160思考機能	s520食道の構造	d155技能の習得	e345よく知らない人
b163基礎的認知機能	s530胃の構造	d160注意を集中すること	e355保健の専門職
b164高次認知機能	s610尿路系の構造	d161注意を向けること	e360その他の専門職
b167言語に関する精神機能	s620骨盤底の構造	d163思考	e410家族の態度
b172計算機能	s710頭頸部の構造	d166読むこと	e415親族の態度
b176複雑な運動を順序を立てて行う精神	s720肩部の構造	d170書くこと	e420友人の態度
b180自己と時間の経験の機能	s730上肢の構造	d172計算	e425知人・仲間・同僚・隣人・コミュニティの成員の態度
b210視覚機能	s740骨盤部の構造	d175問題解決	e430権限をもつ立場にある人々の態度
b215目に付属する構造の機能	s750下肢の構造	d177意思決定	e440対人サービス提供者の態度
b230聴覚機能	s760体幹の構造	d210単一課題の遂行	e450保健の専門職者の態度
b235前庭機能	s770運動に関連したその他の筋骨格構造	d220複数課題の遂行	e455その他の専門職者の態度
b250味覚		d230日課の遂行	e535コミュニケーションサービス・制度・政策
b255嗅覚		d240ストレスとその他の心理的要求への対処	e540交通サービス・制度・政策
b260固有受容覚		d250自分の行動の管理	e570社会保障サービス・制度・政策
b265触覚		d310話し言葉の理解	e575一般的な社会的支援サービス・制
b270温度やその他の刺激に関連した感		d315非言語的メッセージの理解	e580保健サービス・制度・政策
b280痛みの感覚		d325書き言葉によるメッセージの理解	e585教育と訓練のサービス・制度・政策
b310音声機能		d330話すこと	e590労働と雇用のサービス・制度・政策
b320構音機能		d331言語以前の発語(喃語の表出)	
b330音声言語(発話)の流暢性とリズムの機能		d332歌うこと	
b340代替性音声機能		d335非言語的メッセージの表出	
b440呼吸機能		d345書き言葉によるメッセージの表出	
b455運動耐容能		d350会話	
b510摂食機能		d360コミュニケーション用具および技法の利用	
b525排便機能		d410基本的な姿勢の変換	
b530体重維持機能		d415姿勢の保持	
b550体温調節機能		d420乗り移り(移乗)	
b620排尿機能		d430持ち上げることと運ぶこと	
b710関節の可動性の機能		d440細かな手の使用	
b715関節の安定性の機能		d445手と腕の使用	
b720骨の可動性の機能		d446細やかな足の使用	
b730筋力の機能		d450歩行	
b735筋緊張の機能		d455移動	
b740筋の持久性機能		d460さまざまな場所での移動	
b750運動反射機能		d465用具を用いての移動	
b755不随意運動反応機能		d470交通機関や手段の利用	
b760随意運動の制御機能		d510自分の身体を洗うこと	
b761自発的運動		d520身体各部の手入れ	
b765不随意運動の機能		d530排泄	
b770歩行パターン機能		d540更衣	
b780筋と運動機能に関連した感覚		d550食べること	
		d560飲むこと	
		d570健康に注意すること	
		d571安全に注意すること	
		d640調理以外の家事	
		d710基本的な対人関係	
		d720複雑な対人関係	
		d730よく知らない人との関係	
		d740公的な関係	
		d750非公式な社会的関係	
		d760家族関係	
		d770親密な関係	
		d810非公式な教育	
		d815就学前教育	
		d816就学前教育時の生活や課外活動	
		d820学校教育	
		d825職業訓練	
		d835学校生活や関連した活動	
		d880遊びへの取組	
		d920レクリエーションとレジャー	

表2 再抽出した分類項目の一覧

心身機能	身体構造	活動と参加	環境因子
b110意識機能	s110脳の構造	d110注意して視ること	e110個人消費用の製品や物質
b114見当識機能	s120脊髄と関連部位の構造	d115注意して聞くこと	e115日常生活における個人用の製品と用具
b117知的機能	s140交感神経系の構造	d120その他の目的のある感覚	e120個人的な屋内外の移動と交通のための製品と用具
b122全般的な心理社会的機能	s150副交感神経系の構造	d130模倣	e125コミュニケーション用の製品と用具
b125素質と個人特有の機能	<b>s210 眼窩の構造</b>	d131物品を使うことを通しての学習	e130教育用の製品と用具
b126気質と人格の機能	<b>s220 眼球の構造</b>	d132情報の獲得	e140文化・レクリエーション・スポーツ用の製品と用具
b130活力と欲動の機能	<b>s230 目の周囲の構造</b>	d133言語の習得	<b>e150 公共の建物の設計・建設用の製品と用具</b>
b134睡眠機能	s240外耳の構造	d134付加的言語の習得	<b>e240 光</b>
b140注意機能	s250中耳の構造	d135反復	e250音
b144記憶機能	s260内耳の構造	d137概念の習得	e310家族
b147精神運動機能	s310鼻の構造	d140読むことの学習	e315親族
b152情動機能	s320口の構造	d145書くことの学習	e320友人
b156知覚機能	s330咽頭の構造	d150計算の学習	e325知人・仲間・同僚・隣人・コミュニティの成員
b160思考機能	s340喉頭の構造	d155技能の習得	e330権限を持つ立場にある人々
b163基礎的認知機能	s420免疫系の構造	d160注意を集中すること	e340対人サービス提供者
b164高次認知機能	s430呼吸器系の構造	d161注意を向けること	e345よく知らない人
b167言語に関する精神機能	s520食道の構造	d163思考	e355保健の専門職
b172計算機能	s530胃の構造	d166読むこと	e360その他の専門職
b176複雑な運動を順序を立てて行う精神	s610尿路系の構造	d170書くこと	e410家族の態度
b180自己と時間の経験の機能	s620骨盤底の構造	d172計算	e415親族の態度
b210視覚機能	s710頭頸部の構造	d175問題解決	e420友人の態度
b215目に付属する構造の機能	s720肩部の構造	d177意思決定	e425知人・仲間・同僚・隣人・コミュニティの成員の態度
<b>b220目とそれに付属する構造に関連した</b>	s730上肢の構造	d210単一課題の遂行	e430権限をもつ立場にある人々の態度
b230聴覚機能	s740骨盤部の構造	d220複数課題の遂行	e440対人サービス提供者の態度
b235前庭機能	s750下肢の構造	d230日課の遂行	e450専門職者の態度
b250味覚	s760体幹の構造	d240ストレスとその他の心理的要求への対処	e455その他の専門職者の態度
b255嗅覚	s770運動に関連したその他の筋骨格構造	d250自分の行動の管理	e535コミュニケーションサービス・制度・政策
b260固有受容覚		d310話し言葉の理解	e540交通サービス・制度・政策
b265触覚		d315非言語的メッセージの理解	e570社会保障サービス・制度・政策
b270温度やその他の刺激に関連した感覚機能		<b>d320 公式手話によるメッセージの理解</b>	e575一般的な社会的支援サービス・制度・政策
b280痛みの感覚		d325書き言葉によるメッセージの理解	e580保健サービス・制度・政策
b310音声機能		d330話すこと	e585教育と訓練のサービス・制度・政策
b320構音機能		d331言語以前の発語(喃語の表出)	e590労働と雇用のサービス・制度・政策
b330音声言語(発話)の流暢性とリズムの機能		d332歌うこと	
b340代替性音声機能		d335非言語的メッセージの表出	
b440呼吸機能		<b>d340 公式手話によるメッセージの表出</b>	
b455運動耐容能		d345書き言葉によるメッセージの表出	
b510摂食機能		d350会話	
b525排便機能		<b>d355 ディスカッション</b>	
b530体重維持機能		d360コミュニケーション用具および技法の利用	
b550体温調節機能		d410基本的な姿勢の変換	
b620排尿機能		d415姿勢の保持	
b710関節の可動性の機能		d420乗り移り(移乗)	
b715関節の安定性の機能		d430持ち上げることと運ぶこと	
b730筋力の機能		d440細かな手の使用	
b735筋緊張の機能		d445手と腕の使用	
b760随意運動の制御機能		d446細やかな足の使用	
b761自発的運動		d450歩行	
b770歩行パターン機能		d455移動	
		d460さまざまな場所での移動	
		d465用具を用いての移動	
		d470交通機関や手段の利用	
		d510自分の身体を洗うこと	
		d520身体各部の手入れ	
		d530排泄	
		d540更衣	
		d550食べること	
		d560飲むこと	
		d570健康に注意すること	
		d571安全に注意すること	
		<b>d620 物品とサービスの入手</b>	
		d640調理以外の家事	
		d710基本的な対人関係	
		d720複雑な対人関係	
		d730よく知らない人との関係	
		d740公的な関係	
		d750非公式な社会的関係	
		d760家族関係	
		d770親密な関係	
		d810非公式な教育	
		d815就学前教育	
		d816就学前教育時の生活や課外活動	
		d820学校教育	
		d825職業訓練	
		d835学校生活や関連した活動	
		<b>d840 見習研修(職業準備)</b>	
		<b>d860 基本的な経済的取引き</b>	
		d880遊びへの取組	
		d920レクリエーションとレジャー	

<b>削除した項目</b>
b720骨の可動性の機能
b740筋の持久性機能
b750運動反射機能
b755不随意運動反応機能
b765不随意運動の機能
b780筋と運動機能に関連した感覚

**黄色部分は追加した項目**

## 4.6 活用支援電子化ツールの開発と実証

### I はじめに

本研究の前身となる専門研究A「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する実際研究」(平成20年(2008年)度～21年(2009年)度)(以下、前研究)では、ICF/ICF-CYの教育的活用支援電子化ツールの開発の試み(以下、電子化ツール)を行った。

前研究で行った調査では、「ICF関連図」を活用した取組を通して、教職員が子どもを捉える際の視野の広がりや関係者間の共通理解の促進等の成果が報告されている、その一方で作業の繁雑さ等の課題も指摘されており、実際の取組を進めるためには、その改善が重要であると考えられた。この課題について、前研究では、各学校の教育活動の中で行われるICF/ICF-CYの活用のプロセスを分析・整理し、その各プロセスをパソコン上で行うことにより、より簡便に、よりの確に、また、効率的に実現するための活用支援電子化ツールの開発を試みた。

本研究では、前研究で開発を試みた電子化ツールをプロトタイプとして、その機能を充実させるとともに、実際の教育現場での活用を通して、その効果と課題点を実証し、改善を図った。

### II 電子化ツールの機能の改善

#### 1. 電子化ツールプロトタイプの機能

前研究で開発を試みた電子化ツールは、プロトタイプとしてICF関連図の作成の支援を基本とし、ICF/ICF-CYの活用のための次の3つの機能を実現した。

##### (1) ICF-CYの分類項目を基に作成したチェックリストによるチェック機能

ICF-CYの約1700の分類項目について、電子化ツール上に設けられたビジュアルアナログスケール(VAS)によって評価を行う。(図1参照)



図1 チェック機能の画面イメージ  
(※本図は、後述する Ver.3 のもの)

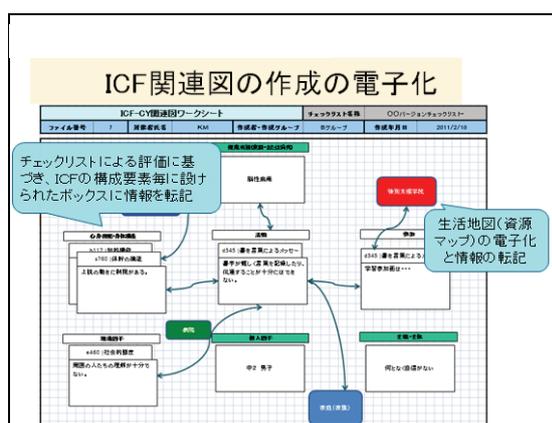


図2 ICF関連図の画面イメージ  
(※本図は、後述する Ver.3 のもの)

ビジュアルアナログスケール(VAS)は、数直線上に、「心身機能・身体構造」の問題の

有無やその程度、「活動・参加」の困難さの有無やその程度、「環境因子」の働きを感覚的にプロットする。「心身機能・身体構造」，「活動・参加」については，数直線上を左から右に向かい，その問題や困難さの有無や程度が大きくなることを示し，また，「環境因子」については，左が阻害的に働き，右が促進的に働くその程度を示すように設定し，その度合いを教職員が感覚的にプロットすることとしている。各チェックリストにプロットした結果はパソコン上で数値化され，構成要素それぞれの項目のまとめりごとに，その度合いの平均値を計算し，平均値以上の項目を自動的にチェックする仕組みとなっている。この情報を基に，担当教職員が課題として重要と考える項目を改めてチェックする。チェックされた項目は，電子化ツール上に設けられたICF関連図作成プロセスへと引き継がれ，該当する各構成要素に自動的に転記する仕組みとなっている。

#### (2) 「生活地図」の作成機能

子どもの生活に関連する機関や人物とその役割や関係を整理し，本人を中心とした「生活地図」を描くための仕組みを電子化ツール上に設けた。ここで作成された生活地図の情報は，ICF関連図作成プロセスへと引き継がれ，構成要素で括られた課題と関連付けされる。

#### (3) 生活地図とチェックリストでチェックされた情報を基にした ICF 関連図の作成機能

生活地図とチェックリストによるチェックによって得られた情報は，Microsoft Excel（以下，Excel）のファイルに自動転記され ICF 関連図の基となる。さらに，担当教職員によって必要な情報が付加されて，また，各構成要素の課題と関連機関や関係者の役割などが線で結ばれて ICF 関連図が作成される。（図 2 参照）

本研究では，これらのプロトタイプの各機能について，その試用を通して課題の検討を進め，以下の改善を順次行った。

## 2. 平成 22 年度の主な改善点

平成 22 年度の研究として，プロトタイプの機能について課題を検討し，チェックリストの作成機能とその保存機能を追加した。（以下，改善後の電子化ツールを電子化ツール Ver. 2 とする。）

#### (1) 多様なチェックリストの作成と活用

プロトタイプでは，あらかじめ決められた項目で構成されたチェックリストが組み込まれているために，新たなチェックリストが作成された場合には，その都度，専門家による組み込みの作業が必要となることが課題として指摘された。

これらの課題点を改善するために，約 1700 項目ある ICF-CY の分類項目から任意に選択した項目で構成されるチェックリスト（以下，バージョンチェックリスト）を作成する機能と，作成されたバージョンチェックリストを保存し，呼び出しをする機能を追加した。なお，「4.5」において，特別支援教育における ICF-CY チェックリストの開発について言及しているので，参考にされたい。

#### (2) ICF-CY チェックデータの保存とデータベース化

対象者毎に作成された個別の ICF-CY チェックデータは，ICF 関連図作成の完了後は保存ができないことが課題として指摘されていた。個別データのその後の推移を分析するた

めに、対象者毎に個別データを一括して保存し、集計・分析をするための機能を追加した。

「5.6」において、電子化ツール Ver. 2 の活用の実証を行っている。これまで、用紙上で付箋紙などを用いて作成されていた ICF 関連図の作業過程が電子化されたことで簡便になったこと、ICF 関連図が Excel 上に作成されたことで、その後の並べ替えや色付けなどが容易になり、関係者間でのファイルの共有による共通理解に繋がる可能性が広がったことなどが報告された。

### 3. 平成 23 年度の主な改善点

平成 23 年度は、電子化ツール Ver. 2 の機能について、課題を検討し、チェックリストデータと個別データの共有を図るためデータファイルのインポートとエクスポート機能を追加した。以下、改善後の電子化ツールを電子化ツール Ver. 3 とする。(図 3)

プロトタイプ及び電子化ツール Ver. 2 では、ともに単独のパソコン上で活用することとして設計している。それらの試用を進める中で課題となったのが、チェックリストデータと個別データの共有であった。

#### (1) チェックリストデータの共有

電子化ツール Ver. 2 では、特定のパソコン上で作成されたバージョンチェックリストは、そのパソコン上で保存され、活用する機能を実現していた。作成されたバージョンチェックリストを他のパソコン上で使用するためには、バージョンチェックリストを再度入力する必要があり活用上の課題として指摘された。

これらの課題点を改善するために、特定のパソコン上で作成されたバージョンチェックリストを外部へファイルとしてエクスポートする機能と、出力されたバージョンチェックリストのファイルを他のパソコンにインポートする機能とを追加した。

#### (2) 個別データの共有

電子化ツール Ver. 2 では、特定のパソコン上で作成された対象者の個別データは、そのパソコンに保存され、必要によって呼び出され、変更やその後の変化を追うことができるようになっていた。そのデータを担当者が変わった場合、また、そのデータを複数の教職員で把握する必要がある場合に、電子データとして共有することができないことが課題として指摘されていた。

これらの課題を改善するために、特定のパソコンで作成された対象者の個別データを外部へファイルとしてエクスポートする機能と、出力された個別データを他のパソコンにインポートする機能とを追加した。



図 3 トップ画面

「5.7」及び「5.8」において、電子化ツール Ver. 3 の活用の実証を行っている。教職員

に一人一台のパソコンが導入されている場合、バージョンチェックリストの共有ができること、また、個々の子どものチェック結果のデータなどが電子ファイルとして作成されるためその共有がよりし易くなることなどが報告された。

### Ⅲ まとめと今後の課題

電子化ツールの作成とその活用実証の各過程で、教育現場の教職員より、課題点や改善点、活用にあたっての工夫点について次のような報告があった。

- ビジュアルアナログスケール (VAS) など直観的な操作で使えることや ICF 関連図への出力が自動化されていることの利便性が評価されるとともに、分類項目のチェックリストについて、ビジュアルアナログスケール (VAS) のプロットした困難さの度合いが、ICF 関連図へ情報として転送されないことが課題として指摘された。
- 電子化ツールで作成された ICF 関連図を教職員間で共有を図るために、様々な情報を付加したり、より見やすく分かりやすくしたりすることで情報量が多くなることもあり、規定値の A 4 判のサイズでは収まりきれない課題が指摘された。また、Excel のシートを規定値の A 4 判から A 3 判サイズに拡張するなどの工夫点も示された。
- バージョンチェックリストの各項目について、あらかじめ設定されている ICF-CY の分類項目の表記だけでなく、より分かりやすい表記に変更したり、説明を加えたりすることを可能にすることが必要であることなど機能強化への提案があった。
- 電子化ツールで作成された ICF 関連図をケース会議などで参加の教職員全員でみるための大型ディスプレイの設備が必要であること、電子化ツールで作成された個別のデータを共有するために LAN 上での活用できるようにすることなど情報の共有に関する提案があった。
- その他、ICF 関連図の出力が Excel ファイルとなっていることについて、各地域や学校のシステムの導入状況に対応して、より共通のファイル形式での取り扱いができるとよいなどの意見があった。

指摘された課題点は、電子化ツールのシステムの仕様上の課題と電子化ツールの活用上の課題に区分して検討する必要がある。

電子化ツールは、チェックリストや ICF 関連図の作成を自動化するものではない。電子化ツールは、活用の前提として、ICF の考え方を理解し、チェックリストの作成、チェックリストでの評価、ICF 関連図の作成などの具体についての理解と活用の経験が必要である。その上で、それらの作業をより効率的に行うことを支援する道具として提供されるものである。

より多くの人たちに、より便利に活用できるような道具として改善する必要があるとと

もに、より適切に活用していくための手立てや方法などについても検討を重ねていく必要がある。

本研究で開発された電子化ツールは、実証の過程を経て改善が行われ、ひとまず、全体の機能を実現できた。今後は、各学校のネットワークシステムの機能の充実に伴い、ネットワーク上での運用なども課題となるだろう。今後とも、この電子化ツールの普及を図るとともに、その効果と課題について検討する必要があるだろう。

(松村勘由，富山比呂志，徳永亜希雄)

## 文献

1. 松村勘由・徳永亜希雄・富山比呂志・加福千佳子・小林幸子(2010). ICF/ICF-CY の教育的活用電子化ツール開発の試みー. 国立特別支援教育総合研究所. 「特別支援教育における ICF-CY 活用に関する実際的研究(平成 20～21 年度)」成果報告書. 139-148.
2. 松村勘由・加福千佳子・徳永亜希雄・小林幸子(2010). 特別支援学校における ICF 及び ICF-CY についての認知度・活用状況等に関する調査のまとめ (最終報告). 国立特別支援教育総合研究所 Web サイト.

## 4.7 特別支援教育における ICF 及び ICF-CY の活用を支える Web ツールの開発と実証

### I はじめに

本研究の前に本研究所で実施した、ICF/ICF-CY に関する研究である「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際研究」(平成 20 年(2008 年)度～21 年(2009 年)度)<sup>2)</sup>において、特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用を支えるためのツールとして、「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」と「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え(FAQ)」を作成し、Web サイト上で公開した。

本稿においては、この 2 つについて、さらにその妥当性を検討し、改良版を公開している。ここでは、前研究での、その開発の経緯を簡単に述べた後、本研究での改良の方法、改良版の内容、今後の課題等について述べる。

### II 「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」について

#### 1. 開発の経緯

本研究の前に本研究所で実施した ICF/ICF-CY に関する研究<sup>2)</sup>を進める中で、各学校から求められたこととして、「ICF/ICF-CY を実際に活用している事例について紹介してほしい」との要望が多くみられた。

このことから、前研究を進める中で行った ICF/ICF-CY の活用に関わる実践研究や実践報告の文献のレビューを通して得られた、その活用事例関連の情報を整理して、特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用事例等のデータベースとして公開し、上記の要望に応えるとともに、広く情報提供を図ることにした。開発の方法としては、以下のような方法をとった。

- ①既存の実践研究、実践報告、及び、いくつかの訪問調査結果も踏まえて、ICF/ICF-CY の活用に関する基本情報を抽出する
- ②各データの記載事項、及びデータベースの検索項目・属性(選択項目)を選定する
- ③上記に基づきデータベースの設計を行い、国立情報学研究所が開発した、CMS (Contents Management System)と LMS (Learning Management System)とグループウェアを統合したコミュニティウェアである NetCommons の汎用データベースモジュールを活用してデータベースを作成する
- ④ICF/ICF-CY の活用に関する実践研究、実践報告を収集・整理し、当データベースの記載事項に対応させてデータを作成し、当データベースに登録して、Web サイト上で公開する(掲載アドレス：<http://www.nise.go.jp/cms/8,556,18.html>)

#### 2. 妥当性の検討

上記のようにして作成・公開した当データベースについて、当研究所専門研修の研

修員（特別支援学校等の教員）78名を対象として、実際に当データベースを使用してもらったうえでのアンケート調査（平成23年(2011年)1月）をもとにして、その妥当性を検討した。調査の結果の概要は、以下のようであった。

- ①当データベースが役に立つと思うかという質問に対して4件法で尋ねた結果、「役に立つ」と答えた者が39名(50.0%)、「まあまあ役に立つ」と答えた者が33名(42.3%)、「あまり役に立たない」と答えた者が2名(2.6%)、「役に立たない」が0名、無回答が4名(5.1%)であった。

ここで、「役に立つ」という回答と「まあまあ役に立つ」という回答を合わせて肯定的な回答、「あまり役に立たない」と「役に立たない」を合わせて否定的な回答とすると、前2者の合計は72名(92.3%)であり、肯定的な回答が多くみられたことになる。また、この回答の理由について自由記述を求めた結果としては、肯定的な回答の理由としては、具体的な実践事例・活用事例が載っており活用しやすい、目的別、観点別等で実践研究、実践報告を調べることができるので必要な情報を得やすい、(ネット上で公開されているので)いつでも調べたいときにすぐに調べられる等の理由が挙げられていた。一方、否定的な意見の理由としては、当データベースのデータ数が少ないこと、知りたい情報についての検索項目を選んで検索しても、そのデータがないことが挙げられていた。

- ②検索結果の画面について、これでよいと思うかという質問に対して、「よい」が63名(80.8%)、「改善すべきである」が10名(12.8%)、無回答が5名(6.4%)であった。ここで、「改善すべきである」と答えた場合の改善点についてについて尋ねた結果としては、検索結果の各データでの記載項目の1つである「文献情報」からその情報(Webサイトでの掲載場所や出版情報)へリンクできるとよいという意見、背景色があるために文字が見にくいという意見がみられた。

- ③当データベースは使いやすいかという質問に対して4件法で尋ねた結果、「使いやすい」が20名(25.6%)、「まあまあ使いやすい」が45名(57.7%)、「少し使いにくい」が4名(5.1%)、「使いにくい」が2名(2.6%)、無回答が7名(9.0%)であった。

ここで、「使いやすい」という回答と「まあまあ使いやすい」という回答を合わせると65名(83.3%)であり、肯定的な回答が多くみられたことになる。また、この回答の理由について自由記述を求めた結果としては、肯定的な回答の理由としては、検索キーワードの入力が(プルダウンの選択方式で)簡単であること、全体に操作がシンプルであること等が挙げられていた。一方、否定的な意見の理由としては、背景色の関係等で文字が読みづらいという意見と、ここでもデータ数が少ないからという意見が挙げられていた。

### 3. 修正・改善

上記のアンケート結果を踏まえて、平成23年(2011年)9月、次のように、当データ

ベースの修正・改善を行い、改良版を公開した。

- ①データベースの検索画面及び検索結果の画面について、見にくさを改善するため、文字の背景に付いていた色とテキストチャーを削除した。
- ②検索結果の画面で、各データの「文献情報」の項目にリンクを張り、その URL から、Web サイト掲載の文献の本体や出版情報等の紹介のページへジャンプできるようにした。

また、本研究の中で、「4.2」で述べた「特別支援教育において ICF 又は ICF-CY の活用を検討している学校等のための活用手順(試案)」を作成したことから、平成 23 年(2011 年)11 月、検索項目として「活用手順文献番号」の項目を新たに追加し、同活用手順の各項目と対応して紹介されている当データベースの文献を、各項目別に、当データベースで検索できるようにした。

#### 4. 改良版の内容

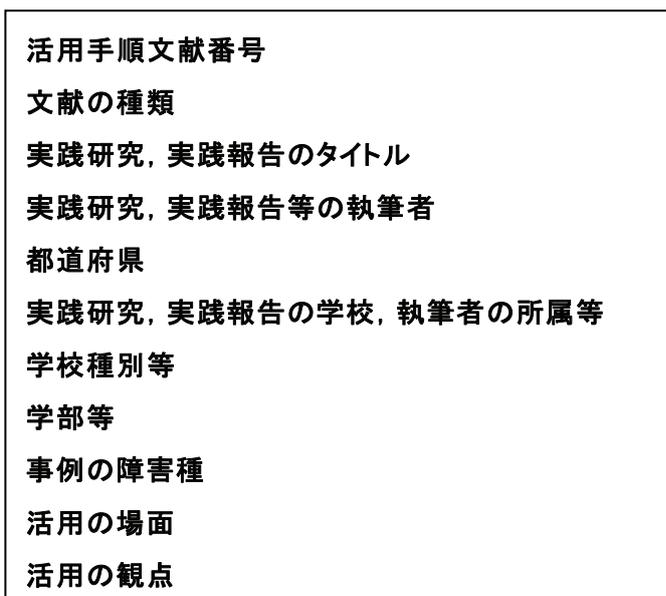
当データベースで、現在、公開されているものは、図 1～図 3 のようになっている。平成 24 年(2012 年)3 月 30 日現在のデータ数は、全 47 件である。



活用手順文献番号	文献の種類	都道府県	学校種別等	学部等	事例の障害種	活用の場面	活用の観点	活用を進めた組織	検索	
									並べ替え	10件

図 1 当データベースの検索項目 (全 9 項目)

検索項目は、活用手順文献番号、文献の種類、都道府県、学校種別等、学部等、事例の障害種、活用の場面、活用の観点、活用を進めた組織の 9 項目である。



活用手順文献番号
文献の種類
実践研究, 実践報告のタイトル
実践研究, 実践報告等の執筆者
都道府県
実践研究, 実践報告の学校, 執筆者の所属等
学校種別等
学部等
事例の障害種
活用の場面
活用の観点

図 2 当データベースの各データの記載項目 (全 17 項目)

活用手順文献番号	Ⅲ－③
文献の種類	活用事例
実践研究, 実践報告の タイトル	特別支援学校での I C F－C Y 活用の実際 3－寄宿舍における I C F－C Y 活用の試み－
実践研究, 実践報告等 の執筆者	〇〇 〇〇
都道府県	静岡県
実践研究, 実践報告の 学校, 執筆者の所属等	静岡県立中央特別支援学校
学校種別等	特別支援学校：肢体不自由
学部等	寄宿舍
事例の障害種	肢体不自由
活用の場面	寄宿舍での指導
活用の観点	チェックリスト
活用した ICF の特徴及 びツール等	オリジナル I C F 関連図, コードセット
活用を進めた組織	教職員の有志
概要	<p>「活動」と「参加」の視点を重視し、現状を考えるステージ 1, 将来を考えるステージ 2 とした独自の関連図と評価の手順を簡素化した寄宿舍コードセットを作成し、子どもの生活を全般的に広く捉えていこうとする取組</p> <p>&lt;構成&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 寄宿舍における ICF 活用の可能性</li> <li>2 取組の実際 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) ICF の概念を学習するための研修会の実施</li> <li>(2) 寄宿舍における ICF 関連図とコードセットの作成</li> </ol> </li> <li>3 まとめと今後の可能性</li> </ol>
活用の背景	寄宿舍は「生活」の実践の場であり、子どもたちは生活を通じて、個々の能力に応じて生活技術の獲得をはかり、生活力の向上を目指している。その寄宿舍で支援にあたる寄宿舍指導員には、一人一人の生活を幅広く捉え、個々の能力に応じた生活技術や生活の工夫を見出す支援の力が要求されている。このことから、生活機能の分類である ICF の視点を寄宿舍の支援に取り入れることは有効であると考えた。
実践研究, 実践報告を 所収する文献等	I C F 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究:89-96 課題別研究報告書 (平成 1 8 年度～1 9 年度) 発行：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
文献情報	<a href="http://www.nise.go.jp/cms/8,5617,18,105.html">http://www.nise.go.jp/cms/8,5617,18,105.html</a>

図 3 当データベースでの検索結果－各文献データの一例－

この例は、検索項目「学校種別」でのプルダウンメニューから、「特別支援学校：肢体不自由」を選択して検索した結果の 1 データの例である。

## 5. 今後の課題

上記のアンケート調査結果でも指摘されていたが、当データベースに登録されているデータ数が、まだ47件と少ないという状況である。このデータ数でも、特別支援教育におけるICF/ICF-CYの実際の活用に関するデータベースとしては、活用の意義はあると思われるが、特に、学校種別でのデータで、特別支援学校（視覚障害）と特別支援学校（聴覚障害）についてのデータが現在1件もないことは課題である。これについては、今回の研究で、特別支援学校（視覚障害）と特別支援学校（聴覚障害）、それぞれについての活用の実際についての学校事例を取り上げており、まずはこの事例を加えるなどして、今後、改善を図っていく必要がある。

## Ⅲ 「特別支援教育におけるICF及びICF-CY活用に関するよくある質問と答え(FAQ)」について

### 1. 開発の経緯

本研究の前に本研究所で実施した「ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」（平成18年(2006年)度～19年(2007年)度）<sup>1)</sup>での成果や、「特別支援教育におけるICF-CYの活用に関する実際研究」（平成20年(2008年)度～21年(2009年)度）<sup>2)</sup>における特別支援学校を対象とした悉皆調査の結果から、ICF/ICF-CYの活用方法についての知見だけではなく、ICF/ICF-CY それ自体やその活用についての基本的な事項についての理解啓発を促す必要があることが分かった。

また、ICF/ICF-CYに関する研修等の場でなされる質問は、多様でありながらも、よく尋ねられる類似したものがあつた。これらのことから、ICF/ICF-CY及びその活用についての「よくある質問と答え(FAQ)」を作成し、広く公開することは意義があると考えられた。さらに、このFAQについて、特別支援教育に特化したものは探しても見当たらなかつた。

そこで、特別支援教育に特化したICF/ICF-CY及びその活用についての「よくある質問と答え(FAQ)」を作成し、Webサイト上で公開することにした。その作成の方法としては、次に挙げるものを元にしながら、複数のスタッフで質問事項の選定と、その回答の作成を行った。

- ①本研究所の専門研修におけるICF/ICF-CY 関連講義後の意見・質問及び自主学習会の資料
- ②ある特別支援学校でのICF/ICF-CY 関連研修会での疑問・意見
- ③本研究所研究研修（特別支援教育指導者研修）を進める上での研究研修員からの疑問等
- ④研究協力者、研究協力機関代表者等の協議をもとに本研究所スタッフが作成した資料

その結果、作成したものを本研究所 Web サイト上で公開した。（掲載アドレス：<http://www.nise.go.jp/cms/8,143,18.html>）

## 2. 妥当性の検討

上記のようにして作成・公開した、「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え(FAQ)」についても、前述と同じく、本研究所専門研修の研修員（特別支援学校等教員）78名を対象として、実際にその内容を閲覧してもらったうえでのアンケート調査の結果をもとにして、その妥当性を検討した。調査の結果の概要は、以下のようであった。

- ①当 FAQ が役に立つと思うかという質問に関して4件法で尋ねた結果、「役に立つ」と答えは者が39名（50.0%）、「まあまあ役に立つ」と答えた者が36名（46.2%）、「あまり役に立たない」と答えた者が2名（2.6%）、「役に立たない」と答えた者が0名、無回答が1名（1.3%）であった。

ここで、「役に立つ」という回答と「まあまあ役に立つ」という回答を合わせて肯定的な回答、「あまり役に立たない」と「役に立たない」を合わせて否定的な回答とすると、前2者の合計は75名（96.2%）であり、肯定的な回答が多くみられたことになる。また、この回答の理由について自由記述を求めた結果としては、肯定的な回答の理由については、基本的な事項が簡潔にまとめられている、自分にも共通する質問が多い、という理由が多く挙げられていた。一方、否定的な意見の理由としては、「実際の活用事例を知りたいのですが」といった現場の教員がまず最初に知りたいと思われることが必要だという意見があった。また、質問内容がもっと増えるとうよいという意見もあった。

- ②当 FAQ が分かりやすいと思うかという質問に関して4件法で尋ねた結果、「分かりやすい」が26名（33.3%）、「まあまあ分かりやすい」が45名（57.7%）、「少しわかりにくい」が5名（6.4%）、「分かりにくい」が0名、無回答が2名（2.6%）であった。ここで、「分かりやすい」という回答と「まあまあ分かりやすい」という回答を合わせると、71名（91.0%）となり、肯定的な回答が多くみられたことになる。

- ③他に必要な項目や内容があるかという質問に関しては、「ある」が14名（17.9%）、「ない」が58名（74.4%）、「無回答」が6名（7.7%）であった。ここで「ある」と答えた場合、その項目や内容を尋ねた結果では、次のようなものがみられた。

- ・(ICIDHの説明は文章でしているが)ICIDHの概念図があるとより分かりやすい。
- ・実際の活用事例や具体的な活用方法、活用手順についての項目があるとよい。
- ・もっと質問項目を増やしてほしい。

- ④不必要な項目や内容はあるかという質問に関しては、「ある」が1名（1.3%）、「ない」が73名（93.6%）、「無回答」が4名（5.1%）であったが、「ある」と答えた場合、その項目や内容を記述するよう求めた結果では、その記述がなかった。

## 3. 修正・改善

上記のアンケート結果を踏まえて、平成23年(2011年)9月、次のように、当FAQ

の修正・改善を行い，改良版を公開した。

- ①上記の「実際の活用事例や具体的な活用方法，活用手順についての項目があるとよい。」という意見に対応して，その事項「ICF や ICF-CY を実際に活用した事例について教えてください。」を作成し，「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」へのリンクを張り，その内容を閲覧できるようにした。
- ②上記の「もっと質問項目を増やしてほしい。」という意見に対応し，項目として「より詳細な情報について」を加え，これまで本研究所で実施した ICF/ICF-CY 関連研究の，本研究所 Web サイトに掲載の研究成果報告書へリンクを張り，その内容を閲覧できるようにした。また，本研究での研究内容の1つである，多職種間連携についての項目「多職種間連携を進めようと考えているのですが，ICF や ICF-CY を活用することによってどのようなメリットがありますか？」を追加した。ここで，質問項目を増やすことについて「より詳細な情報について」という形で対応したのは，当 FAQ 本体での質問項目は，重要であると考えられる基本的な事項のみにとどめるという方針をとったことによる。
- ③上記の「ICIDH の概念図があるとより分かりやすい。」という意見に対応し，その図を ICF の前のバージョンであるとのキャプション付きで挿入した。

また，当 FAQ と関連するものとして，平成 23 年(2011 年)11 月，本研究所研修員（特別支援学校教員等）から，学校現場での具体的な質問事項を挙げてもらい，それらを整理し選定した質問と回答を，「特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用に関する，学校現場の先生から具体的な質問と答え」として，当 FAQ とは別項目として，Web サイト上で公開した。（掲載アドレス：<http://www.nise.go.jp/cms/8,5526,18.html>）

#### 4. 改良版の内容

当 FAQ で，現在，公開されているものについて，その質問事項は，次のようになっている。

##### 【質問内容】

##### 1 ICF 及び ICF-CY そのものについて

- (1)特別支援学校学習指導要領の解説書に「ICF」について述べられていますが，基本的なところが分かりません。教えてください。
- (2)ICF について述べられる際，よく「ICIDH」というものが登場します。ICF とは違うのですか？
- (3)ICF の説明の中にでてくる「医学モデル」と「社会モデル」，そして統合したモデルとはどういうことですか？
- (4)「ICF-CY」とは何ですか？

##### 2 特別支援教育における活用について

- (1)ICF や ICF-CY を活用することのメリットは何ですか？

(2)多職種間連携を進めようと考えているのですが、ICF や ICF-CY を活用することによってどのようなメリットがありますか？

(3)ICF や ICF-CY を活用する上での個人情報の取り扱いについて、工夫している事例があれば教えてください。

(4)ICF や ICF-CY を実際に活用した事例について教えてください。

3 より詳細な情報について

また、「特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用に関する、学校現場の先生から具体的な質問と答え」について、その質問事項の大項目は、次のようになっている。この大項目の元に、いくつかの具体的な質問事項が挙げられ、各回答が記載されている。

#### 【質問内容】

(1)実践への位置づけについて

(2)活用事例について

(3)キャリア教育との関連について

(4)ICF 関連図の活用について

(5)他職種との連携について

(6)ICIDH（国際障害分類，1980）について

(7)本人の特性について

(8)活動と参加について

## 5. 今後の課題

当 FAQ の活用方法として、特別支援教育における ICF/ICF-CY について関心がある者が、Web サイト上で基本的な知識を得るということがあるが、学校現場での活用方法としては、学校等での ICF/ICF-CY に関する基礎的事項に関わる研修や研究会等で使うことが想定される。本研究を進める中で、そのような活用を行った学校等の例を、いくつか聞いているが、その実際についての使用結果を整理する等を通して、当 FAQ を、より妥当なものにしていくことが今後の課題である。

## IV おわりに

本稿では、特別支援教育における ICF/ICF-CY 活用を支えるためのツールとして、「ICF/ICF-CY 活用事例等文献データベース」と「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え(FAQ)」の開発と実証について述べてきた。今回得られた課題等をもとに改良を進め、学校現場等での活用に資するコンテンツの充実を図っていきたい。

(金子健，徳永亜希雄，溝端英二)

## 文献

1. 国立特別支援教育総合研究所(2008).課題別研究「ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究（平成 18 年度～19 年度）」成果報告書.
2. 国立特別支援教育総合研究所(2010).専門研究A「特別支援教育における ICF-CY の活用に関する実際的研究（平成 20 年度～21 年度）」成果報告書.